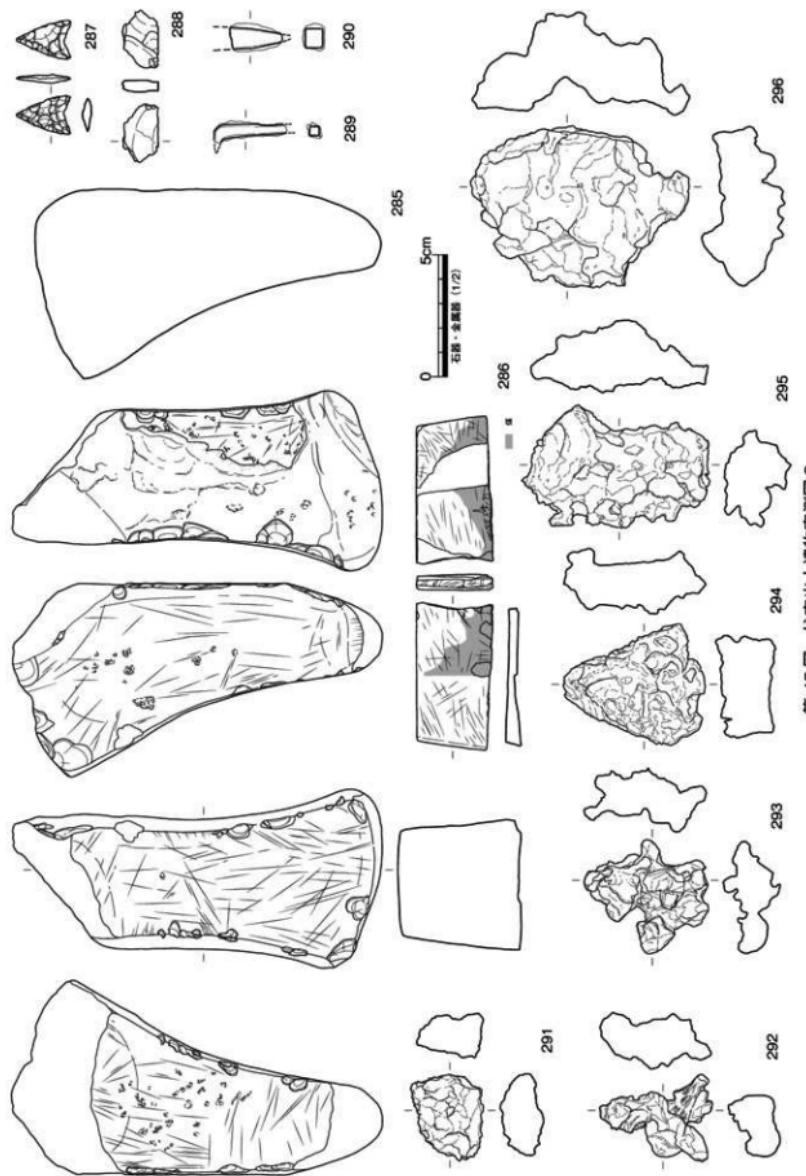
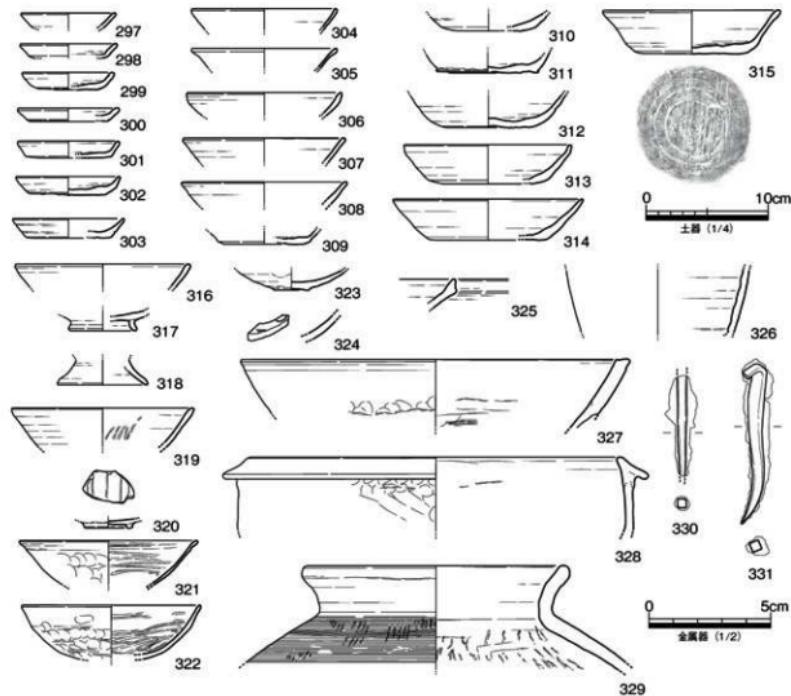


第44図 柱穴出土遺物実測図1



第45図 柱穴出土遺物実測図2



第46図 柱穴出土遺物実測図3

SK04（第50図）

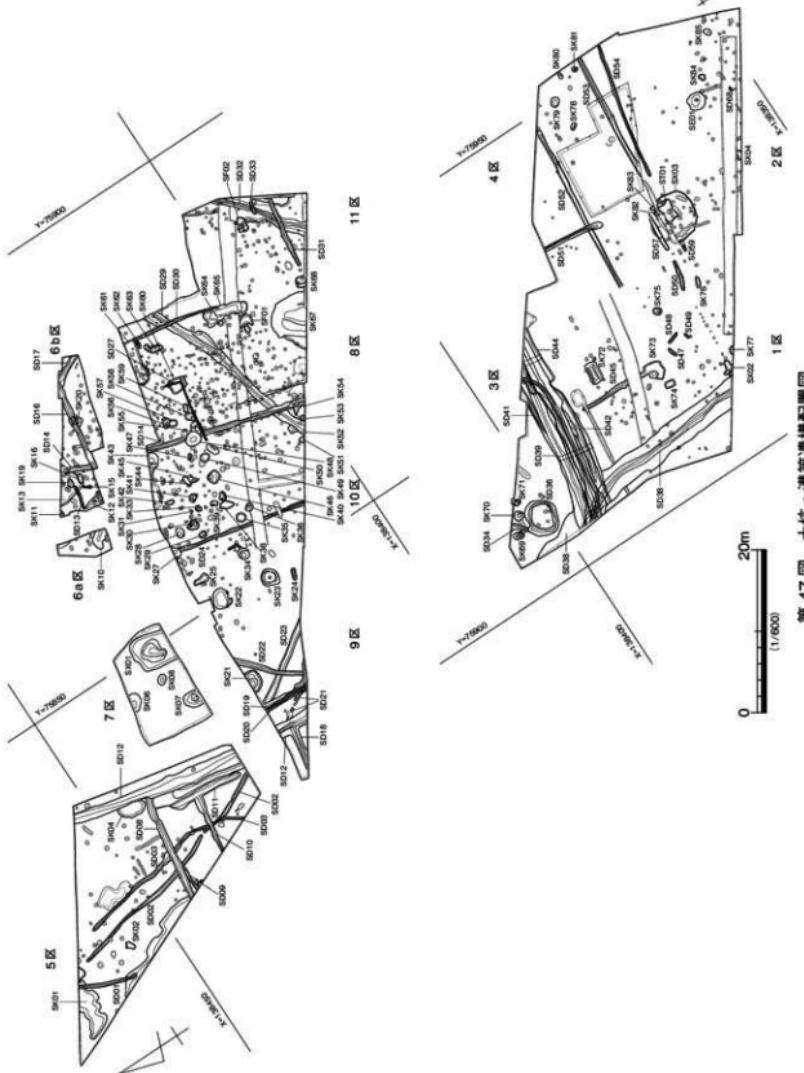
5区北東部で検出した土坑である。SD01と重複し、切り合い関係よりSD01より先行する。南北3.41m、東西1.72m以上を測り、平面形は長楕円形を呈するとみられる。残存深は0.15m前後を測る。埋土等に関する情報は、記録化されておらず不詳である。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿・杯等の小片が11点出土した。**332**は土師質土器皿である。**333**は土師質土器杯。内外面の一部に煤が付着する。

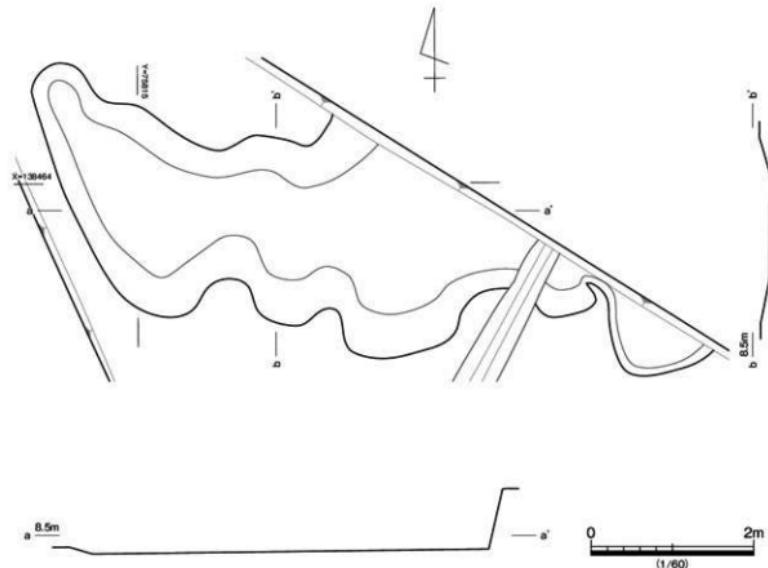
SK06（第51図）

7区中央北端で検出した土坑である。北半部は調査区外へ延長し、全形は不詳。東西1.58m以上、南北1.89m以上、平面形は長楕円ないしは隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.38mであった。

遺物は、弥生土器高杯や須恵器、土師質土器杯、瓦器等の小片約20点のほか、鉄滓1点（**334**）が出土した。



第47図 土坑・溝等遺構配置図



第48図 SK01 平・断面図

SK07（第51図）

7区南西隅部で検出した土坑である。南半部は調査区外へ延長し、全形は不詳。東西1.97m、南北1.97m以上、平面形は歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.59mであった。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯・足釜、瓦器皿・碗等の小片約70点が出土した。335は土師質土器皿、336・337は同杯、338は和泉型瓦器椀、339は同皿、340は土師質土器足釜の脚部小片として図化した。

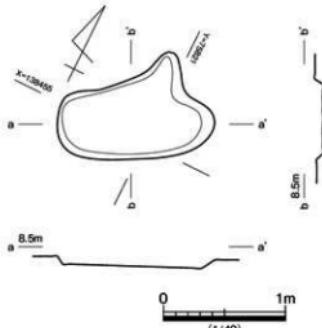
SK08（第52図）

7区中央部で検出した土坑である。南北1.28m、東西0.94m、平面形は隅丸方形状を呈する。残存深は0.20mであった。

遺物は、弥生土器や黒色土器、土師質土器や瓦器等の小片14点が出土した。

SK10（第53図）

6a区南東隅で検出した大型土坑である。東半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。東西長1.98m以上、南北幅1.36～1.50m、主軸方向N 39.04°Wに配され、平面形は歪な隅丸方形状を呈するとみ



第49図 SK02 平・断面図

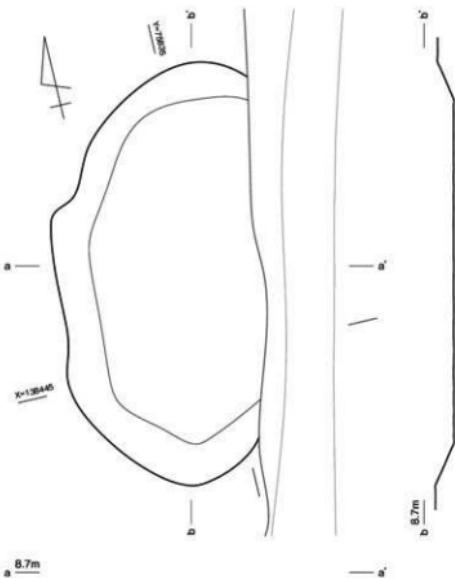
られる。残存深は0.38m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は4層に細分され、シルトないし細砂がレンズ状堆積していた。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿等の小片12点が出土した。**341**は土師質土器杯である。

SK11（第53図）

6 b区北西隅部で検出した土坑である。南東隅、東西0.56m、南北0.26mを検出したのみで、全形は不明である。残存深は0.59mを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、須恵器や土師質土器皿・杯等の小片6点が出土したのみである。**342**は土師質土器皿、**343・344**は同杯である。



SK12（第53図）

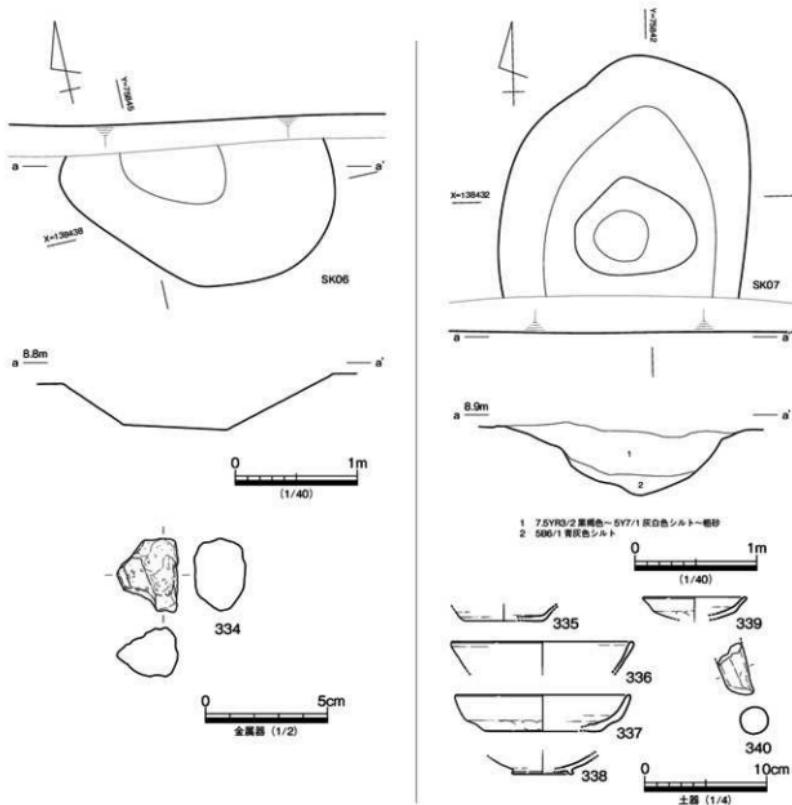
6 b区南西隅で検出した大型土坑である。東半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。SB02・04と重複し、切り合い関係よりSB04より先行し、SB02より後出する。後述する出土遺物が本遺構に伴うものであれば、これら建物遺構よりも明確に先行するはずである。南北

長2.6m以上、東西幅1.2m以上、掘方
北辺は概ね直線状を呈し、北より15.95°西偏して配される。残存深0.28mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土はオリーブ黒色シルトの単層であったとみられる。既述したSK05と、規模や方向、埋土が近似し、類似した性格を有する遺構の可能性が考えられる。なおSK05とは約1.9m離れる。

遺物は、ほぼ完形の土師器直口壺1点**345**が出土したのみである。長さ8.5cm、幅6.2cmにわたり、体部中央を大きく破損する。残存状況より意図的に穿孔されたものと思われるが、破断面が磨滅しており、断定は困難である。古墳時代中期前葉に位置付けられ、ベースであるSR01からの混入遺物と考えられる。

SK13（第54図）

6 b区北西部で検出した大型土坑である。SB02、SK03、SD02・04と重複し、そのいずれの遺構よりも先行する。北半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。東西2.7m以上、南北3.9m以上、



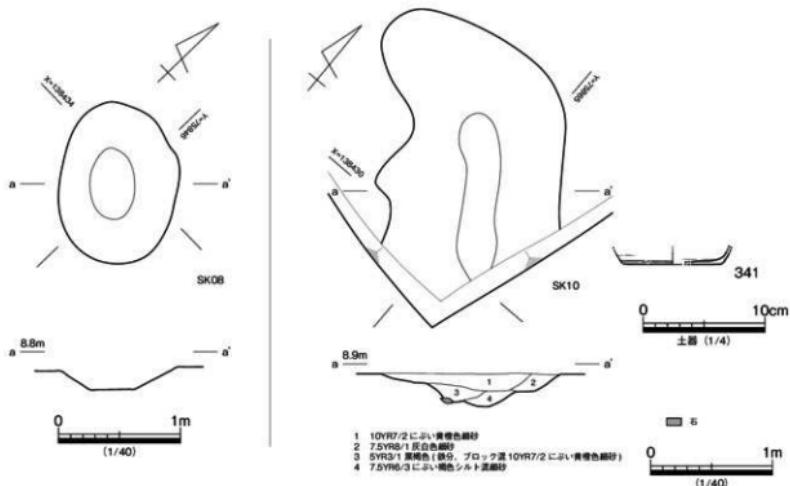
第51図 SK06(左)・SK07(右) 平・断面・出土遺物実測図

主軸方向N 13.61° Wを測り、平面形は方形を呈するとみられる。残存深は0.15mで、断面形は概ね逆台形状を呈し、底面は平坦であった。埋土は2層に細分され、褐色系シルトないし細～粗砂が堆積していた。竪穴建物の可能性も考えられるが、主柱穴や竈等、根拠となる遺構が確認されておらず、断定はできない。

遺物は、弥生土器、須恵器壺、土師質土器杯等の小片4点が出土した。346は土坑上面で出土した須恵器短頸壺である。9世紀後半～10世紀前葉に遡り、混入資料である。

SK15（第54図）

6b区西半部で検出した溝状を呈する土坑である。南北長1.17m、東西幅0.16～0.29m、主軸方向N 33.97° Eに配され、平面形は歪な溝状を呈する。残存深は0.05～0.47mを測り、南端部はピット状に深く掘り込まれる。埋土等に関する情報は、記録化されておらず不明である。



第52図 SK08(左)・SK10(右) 平・断面・出土遺物実測図

遺物は、土師質土器皿・杯等の小片7点が出土した。347は土師質土器皿、348は完形の同杯である。外底面は、回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を施し、ヘラ切り痕はナデ消されている。

SK16(第54図)

6 b区西半部で検出した土坑である。SK05と重複し、切り合い関係からSK05より後出する。東西1.20m、南北0.60m、主軸方向N 70.5°Wを測り、平面形は整った隅丸長方形を呈する。残存深は0.23mであった。

遺物は、土師質土器皿・杯、瓦質土器等の小片16点が出土した。349・350は土師質土器杯である。

SK20(第55図)

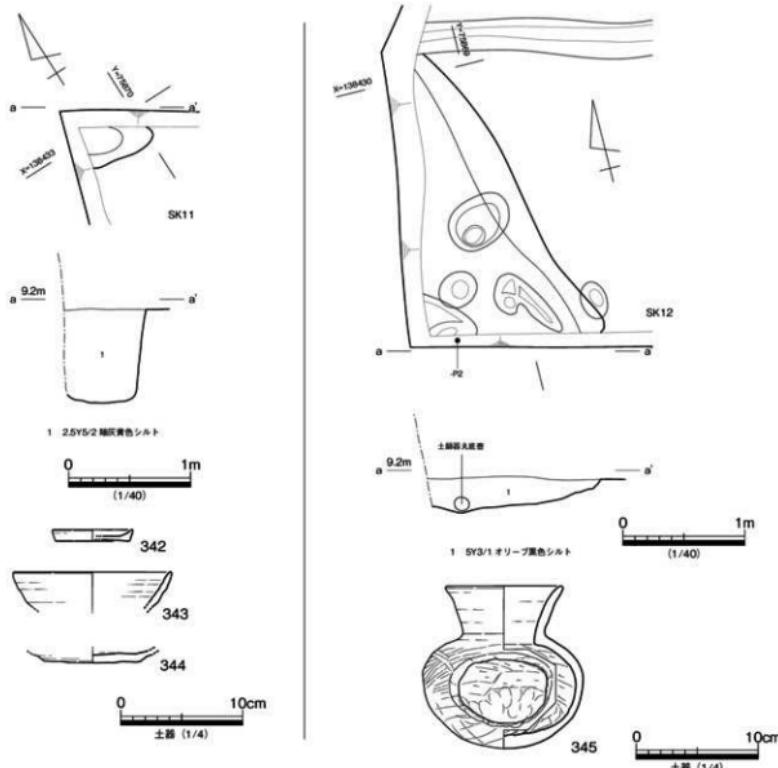
6 b区中央部で検出した土坑である。SD01と重複し、切り合い関係より先行する。東西約1.5m、南北1.63mを測り、平面形は歪な梢円形状を呈するとみられる。残存深は0.54mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、ほぼ黄灰色シルトが堆積する。

遺物は、弥生土器甕・壺、須恵器、土師質土器皿・杯等の小片21点が出土した。

SK21(第56図)

9区西北部で検出した大型土坑である。北半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。現状で、東西長2.77m、南北幅1.48m以上、主軸方向はN 85.32°Wに配され、平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.73mを測り、断面形は概ね碗底状を呈する。埋土は2層に細分された。

遺物は、弥生土器甕や土師器甕、須恵器、土師質土器皿、瓦器碗等の小片約40点が出土した。層位別に、遺物の取り上げはなされていない。

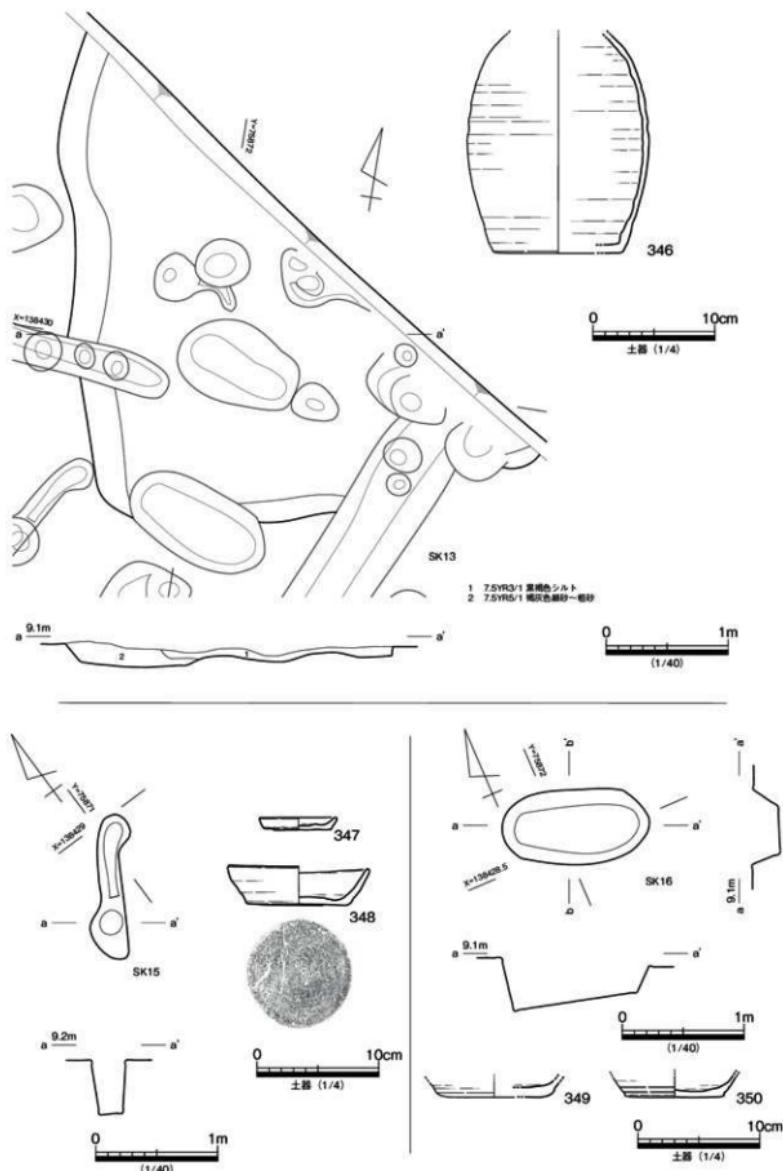


第53図 SK11（左）・SK12（右）平・断面・出土遺物実測図

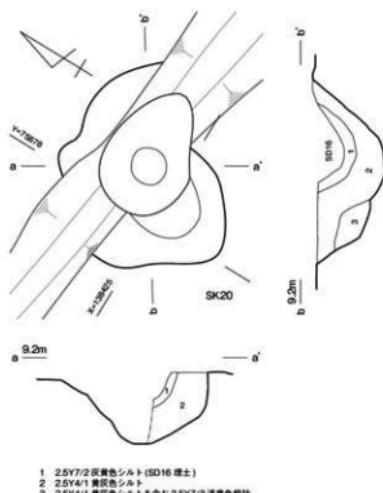
SK22（第57図）

9区中央北半で検出した大型土坑である。東西長2.50m、南北幅1.82m、主軸方向はN 68.95° Wに配され、平面形は歪な隅丸方形を呈する。平面プランの不安定さは、おそらく複数構造の重複の誤認による可能性が高い。残存深は0.50mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は3層に細分された。上位2層は下層を掘り込むように堆積しており、下層埋没後に再度開削等がなされた可能性も考えられるが、断定するまでには至らない。

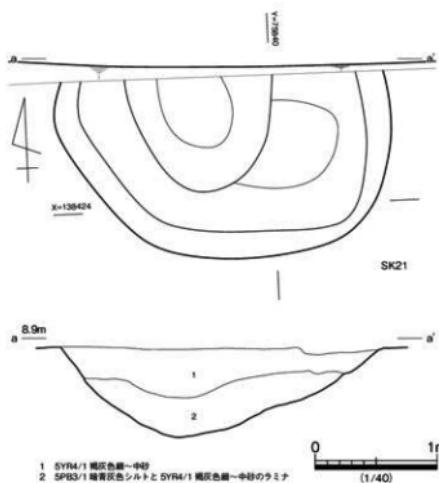
遺物は、縄文土器や弥生土器甕、土師器、須恵器、土師質土器皿・杯・碗・鍋、黒色土器、瓦器皿・碗、布目瓦等の小片約100点のほか、鉄製品2点が出土した。層位別に、遺物の取り上げはなされていない。351・352は土師質土器甕。353は和泉型瓦器碗。尾上編年Ⅲ-3期前後か。354は縄文土器深鉢で、肥厚する口縁部に2条の沈線を施す。355は平瓦片で、凸面縄目タタキ痕より古代に遡る。356は鉄釘、357は鉄製のU字形鋤・鋤先である。



第54図 SK13(上)・SK15(下左)・SK16(下右) 平・断面・出土遺物実測図



第55図 SK20 平・断面図



第56図 SK21 平・断面図

SK23 (第59図)

9区中央南半部で検出した大型土坑である。東西194m、南北2.18m、主軸方向はN 27.05°Eに配され、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈する。残存深は0.70mと深く、上位0.2mは緩やかに掘り込まれ、それより下位は直に近く、また底面は概ね平坦で、下半部の断面形は逆台形状を呈する。断面形状より、造構開削後一定期間オープンな状況で放置され、その間に掘り方上面付近が浸食により崩落し、擂鉢状の断面を呈するに至ったものと考えられる。埋土は3層に細分され、下半部に堆積した下位2層は、地下水等の影響によるためか、グライ化した可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿、碗、瓦器碗等の小片約20点と、鉄製品1点が出土した。本造構も、層位別の遺物の取り上げはなされていない。358は三角形状の鐵板で、小片のため器種は不明。

SK24 (第59図)

9区中央南端で検出した土坑である。東西1.48m、南北0.48m、主軸方向はN 67.88°Wに配され、平面形は小規模な溝状を呈する。柱穴2基が底面より掘り込まれる。残存深は0.03mと浅い。埋土等に関する記録化はなされていない。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器の小片4点が出土したのみである。

SK25 (第60図)

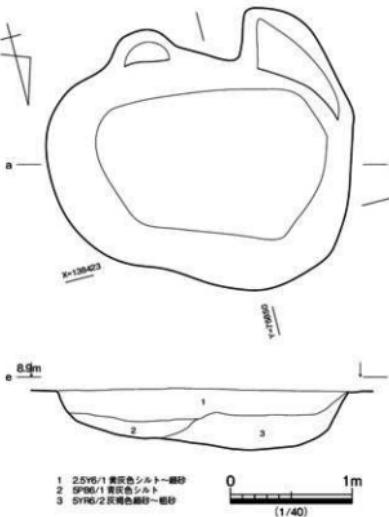
9区中央北半部で検出した土坑である。南北長2.02m、東西幅0.60~1.03m、主軸方向N 136°Eとほぼ正方位に配され、平面形は不整な長楕円形を呈する。残存深は0.08mと浅い。埋土等に関する記録化はなされていない。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿等の小片11点が出土した。

SK27 (第60図)

9区北東端部で検出した土坑である。切り合ひ関係より、SD24より後出する。また北半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。東西1.53m以上、南北0.75m以上、平面形はやや歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.08~0.16mを測り、断面形は不定形を呈する。埋土は黒褐色シルトの単層であった。

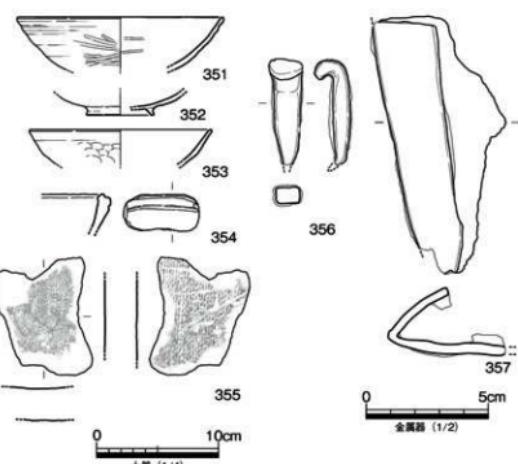
遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯等の小片15点が出土した。359~361はいずれも土師質土器杯。



SK28 (第60図)

9区東半部で検出した土坑である。東西1.22m、南北0.96m、主軸方向はN 71.15°Wに配され、平面形は隅丸方形を呈する。残存深は0.14mを測る。埋土等に関する情報は記録化されていない。

遺物は、土師質土器皿等の小片7点が出土したのみである。362は土師器杯で、古代に遡る混入資料である。

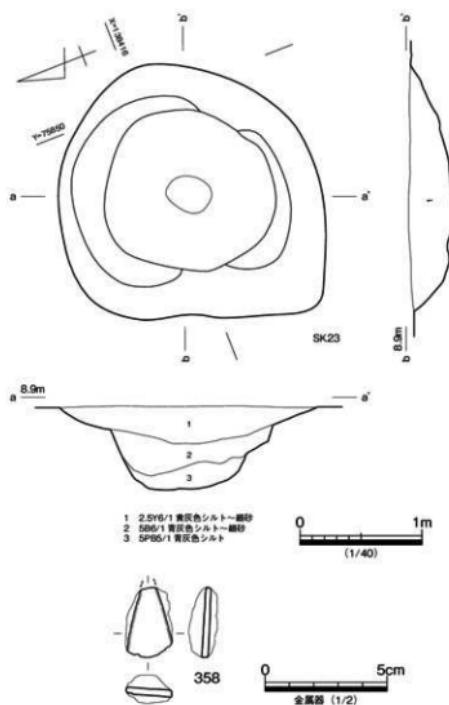


SK29 (第60図)

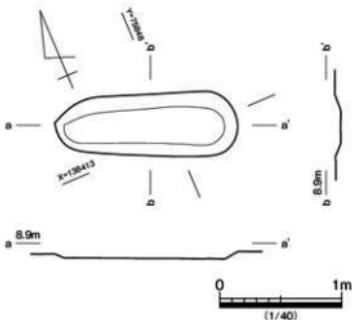
10区北東隅部で検出した土坑である。南北0.93m、東西0.79m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.31mを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器や土師質土器の小片3点が出土したのみである。

第57図 SK22 平・断面・出土遺物実測図



第58図 SK23 平・断面・出土遺物実測図



第59図 SK24 平・断面図

10区西端で検出した土坑である。西側にL字状に配された溝SD25が付す。土坑は、東西1.39m、南北1.38m、平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.3mであった。埋土等に関する情報は記

SK30(第61図)

9区東半部で検出した土坑で、南半部は10区に及ぶ。東西1.31m、南北0.93m、主軸方向N 70.32°Eに配された、平面隅丸方形を呈する土坑とみられるが、複数の遺構の重複によるためか、検出状況は不定形を呈する。残存深は0.40mであった。埋土等に関する情報は記録化されていない。

遺物は、弥生土器や土師質土器杯等の小片6点が出土したのみである。

SK31(第61図)

10区中央北端部で検出した土坑である。北半部は9区で検出されておらず、全形は不明である。東西0.51m、南北0.40m以上、平面形は楕円形を呈するとみられる。残存深は0.11mを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

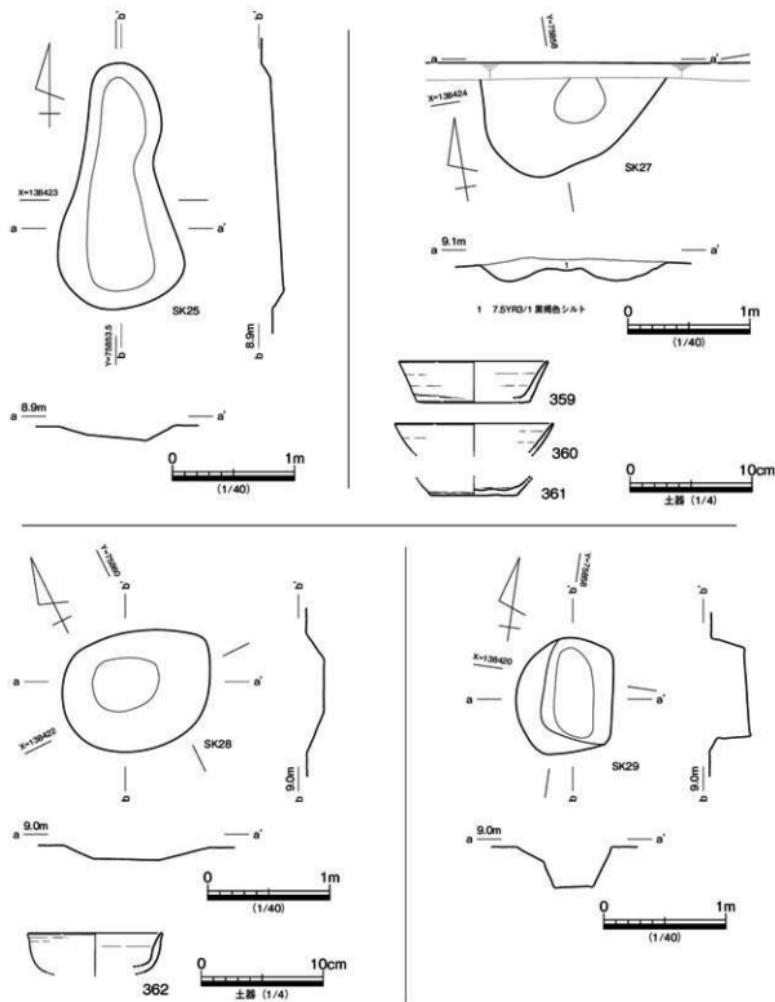
遺物は、弥生土器や土師質土器皿の小片2点が出土したのみである。

SK33(第62図)

10区中央北半部で検出した土坑である。東西0.82m、南北0.65m、平面形はやや歪な楕円形を呈する。残存深は0.25mを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯、瓦器等の小片約20点が出土した。363は土師質土器皿、364は同杯である。365は土師器皿で、古代に遡る混入資料である。

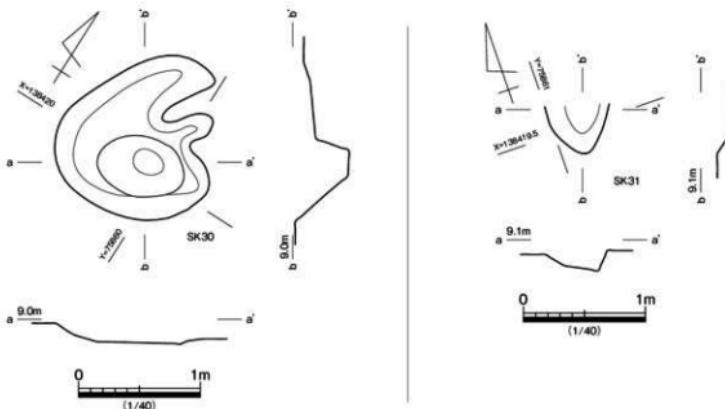
SK34・SD25(第63図)



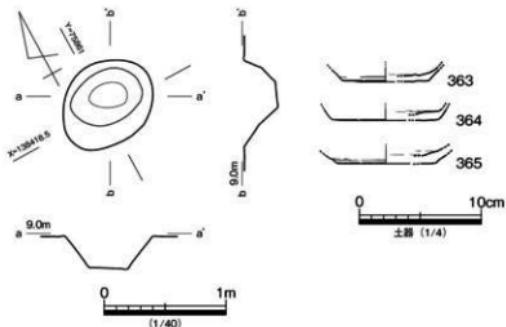
第60図 SK25（上左）・SK27（上右）・SK28（下左）・SK29（下右）平・断面・出土遺物実測図

録化されていないため不明。

遺物は、SD25 を含め、弥生土器壺や土師質土器皿・杯・足釜等の小片約 50 点のほか、鐵製品 1 点が出土した。366 は土師質土器皿、367～371 は同杯である。372 は矩形の板状鉄製品残欠で、器種は不明である。



第61図 SK30(左)・SK31(右) 平・断面図



第62図 SK33 平・断面・出土遺物実測図

該時期に位置付けられるものと考える。

SK35(第64図)

10区中央西端部で検出した土坑である。南北1.19m、東西1.10m、平面形は略円形を呈する。残存深は0.04mと浅い。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、混入とみられる弥生土器小片3点が出土したのみであり、時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等より、当

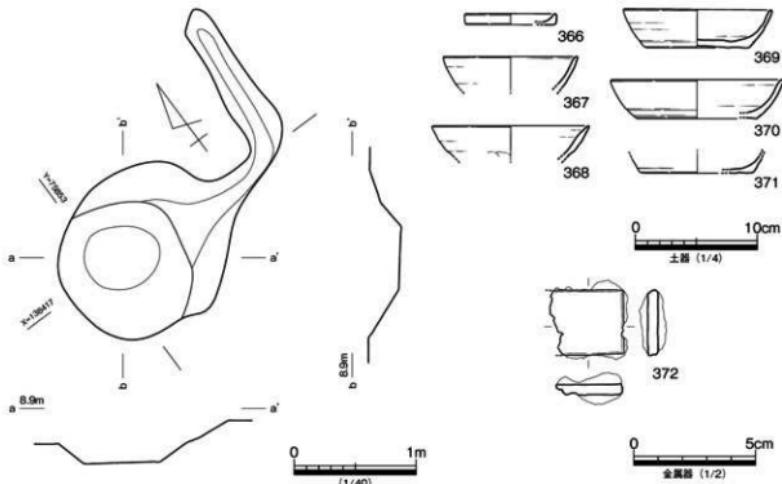
SK36(第64図)

10区中央東半部で検出した土坑である。東西1.0m、南北0.87m、平面形はやや歪な橢円形を呈する。残存深は0.32mを測り、断面形は概ね逆台形を呈し、東半部に深いテラスが付す。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、須恵器杯や土師質土器皿・碗、瓦器等の小片約25点が出土した。373は土師質土器杯、374は同碗である。

SK38(第64図)

10区中央部で検出した土坑である。南北1.76m、東西1.00m、平面形は歪な隅丸菱形状を呈する。残存深は0.08mと浅い。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。



第63図 SK34・SD25 平・断面・出土遺物実測図

遺物は、弥生土器や土師質土器の小片6点が出土したのみである。

SK39（第64図）

10区中央北半部で検出した土坑である。南北0.94m、東西0.55m、平面形は歪な楕円形を呈する。残存深は0.14mを測り、底面東辺部に浅いテラスが伴う。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器や土師質土器の小片3点が出土したのみである。

SK40（第65図）

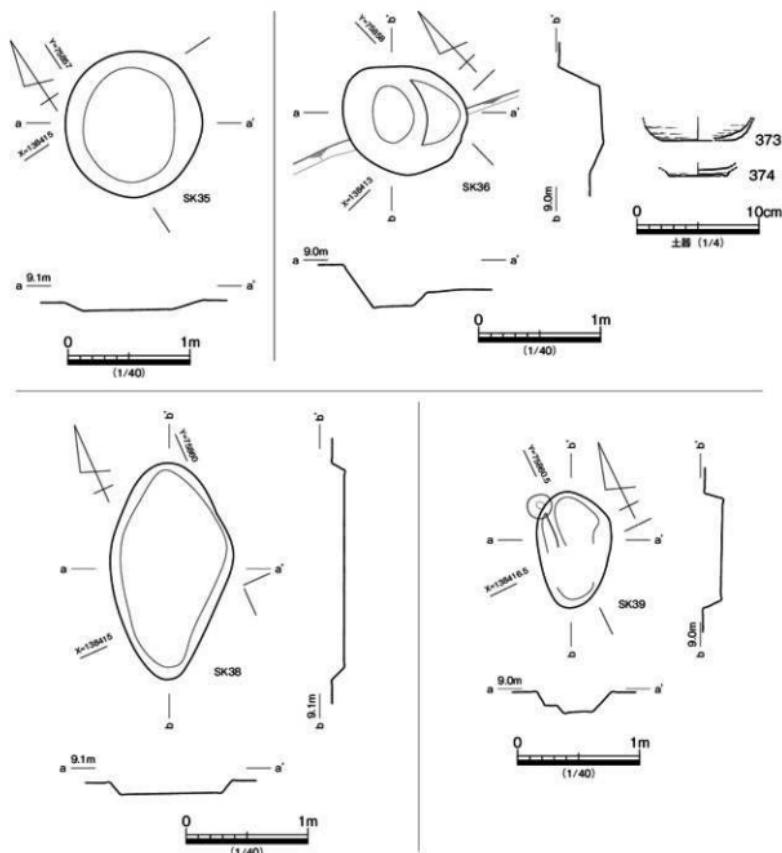
10区中央部で検出した土坑である。東西1.08m、南北0.77m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.16mで、底面南辺部に浅いテラスが付す。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、混入とみられる弥生土器壺等の小片2点が出土したのみであり、時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等より、当該時期に位置付けられるものと考える。

SK41（第65図）

10区中央北半部で検出した土坑である。上面よりSP103が掘り込まれる。東西1.01m、南北0.80m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.12mであった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等より、当該時期に位置付けられるものと考える。



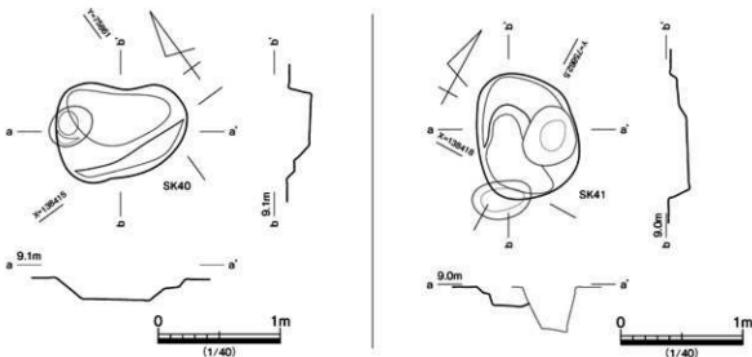
第64図 SK35（左上）・SK36（右上）・SK38（左下）・SK39（右下）平・断面・出土遺物実測図
SK42（第66図）

9区東半部で検出した土坑である。南北1.03m、東西0.48m、主軸方向はN 15.74° Eに配され、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈する。残存深は0.11mであった。埋土等に関する情報は記録化されていない。

遺物は、混入と考えられる弥生土器小片1点が出土したのみである。

SK43（第66図）

9区北東隅部で検出した大型土坑である。北半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。また、切り合い関係よりSD14より先行する。東西2.69m以上、南北1.09m以上、平面形は歪な隅丸方



第65図 SK40(左)・SK41(右) 平・断面図

形状を呈するとみられる。残存深は 0.26 m を測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は黒色シルトの単層であった。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿等の小片 17 点が出土した。

SK44（第67図）

10 区北東部で検出した土坑である。SB03 と重複し、切り合い関係より先行する。東西 1.38 m、南北 0.56 m、主軸方向 N 84.32° E に配され、平面形はやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は 0.10 m を測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器甕等の小片約 10 点のほか、滑石製勾玉 1 点、同白玉 12 点が出土した。土器や玉類は、ベース層である SR01 上層からも出土しており、本土坑に伴う遺物ではなく混入資料である。375 ~ 376 は滑石製白玉である。387 は端部を環状に折り返した鉄製品で、用途は不明。

SK45（第67図）

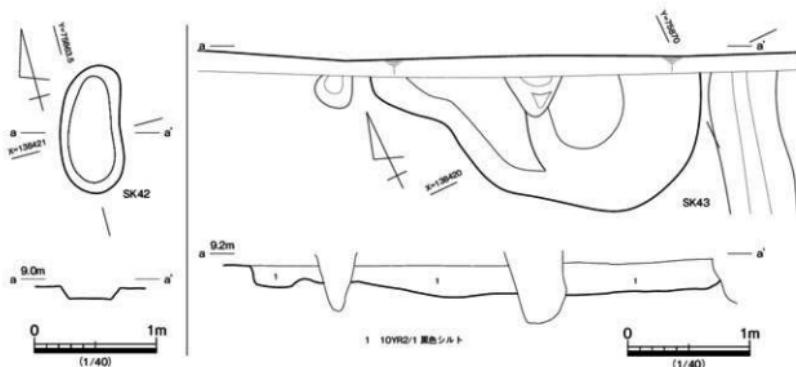
10 区中央北半部で検出した土坑である。南北 0.73 m、東西 0.44 m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は 0.19 m を測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、器種不詳の土器小片 1 点が出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。周辺遺構より、当該時期に位置付けられるものと考える。

SK46（第67図）

10 区中央北半部で検出した土坑である。SB04 と重複し、切り合い関係より先行する。東西 1.65 m、南北 1.48 m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深 0.26 m を測り、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は 2 層に細分され、褐色系細砂～シルトがレンズ状に堆積する。

遺物は、混入資料と考えられる弥生土器甕等の小片約 20 点が出土したのみであり、時期を特定する資料に欠けるが、遺構の重複関係等より、当該時期に位置付けられるものと考える。



第66図 SK42(左)・SK43(右) 平・断面図

SK47(第68図)

10区南東隅部で検出した土坑である。西半部をSD06に切られるため、全形は不明。SD06より先行する。東西0.36m以上、南北0.60m以上、平面形は楕円形を呈するとみられる。残存深は0.25mであった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、混入とみられる弥生土器小片1点が出土したのみであり、時期を特定する資料に欠けるが、遺構の重複関係等より、当該時期に位置付けられるものと考える。

SK48(第68図)

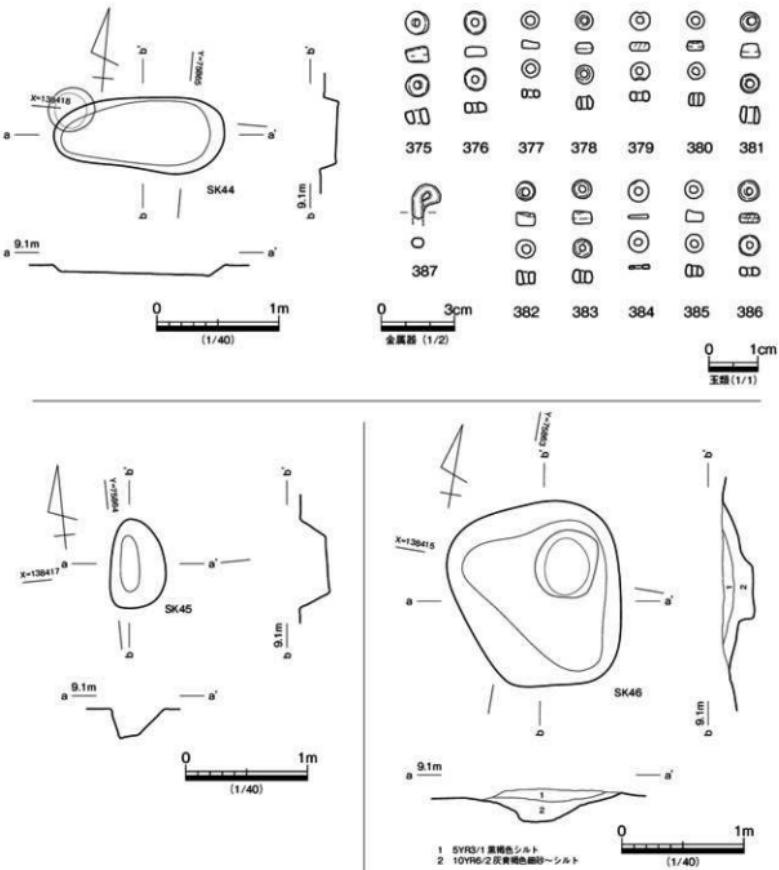
10区北東部で検出した大型土坑である。SK29、SD02と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。東西1.69m、南北1.93m、平面形は歪な楕円形を呈する。残存深は0.56mを測り、断面形は碗底状を呈する。埋土は3層に細分され、レンズ状に堆積する。下層はグライ化した青灰色シルトが堆積し、滞水下堆積の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯・碗、瓦器碗、白磁碗、東播系須恵器片口鉢などの小片約70点のほか、鉄滓1点が出土した。**388**は黒色土器碗。**389**は和泉型瓦器碗。尾上編年Ⅲ-3期前後か。**391**は東播系須恵器片口鉢の底部片である。**390**は大宰府分類白磁碗VもしくはⅦ類。**392**は鉄釘として図化した。**393**は鉄滓である。

SK49(第68図)

10区中央東半部で検出した土坑である。SB04と重複し、切り合い関係より後出する。南北1.13m、東西1.03m、平面形はやや歪な楕円形を呈する。残存深は0.46mを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿、瓦器等の小片約30点と、鉄滓1点が出土した。出土遺物の大半は、混入とみられる弥生土器である。**394**・**395**は土師質土器皿で、**394**は完形品である。

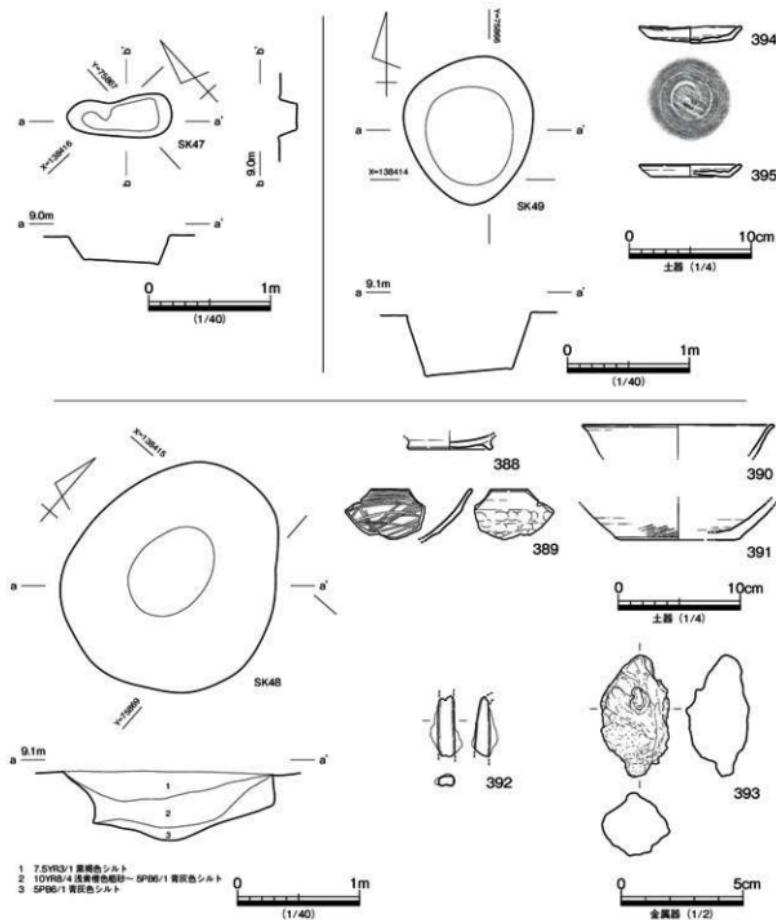


第67図 SK44(上)・SK45(下左)・SK46(下右) 平・断面・出土遺物実測図

SK50(第69図)

10区中央東半部で検出した土坑である。東西1.76m、南北0.79m、平面形はやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.29mであった。埋土は3層に細分されており、東端部で確認された灰白色シルト(3層)は、上面より穿たれた別遣構の埋土の可能性も考えられるが、平面プランとしてとらえられていいないため、断定はできない。

遺物は、混入とみられる弥生土器甕等の小片8点が出土した。時期を特定する資料に欠けるが、周辺遣構との関係等より、当該時期に位置付けられるものと考える。



第68図 SK47（上左）・SK48（下）・SK49（上右）平・断面・出土遺物実測図

SK51（第69図）

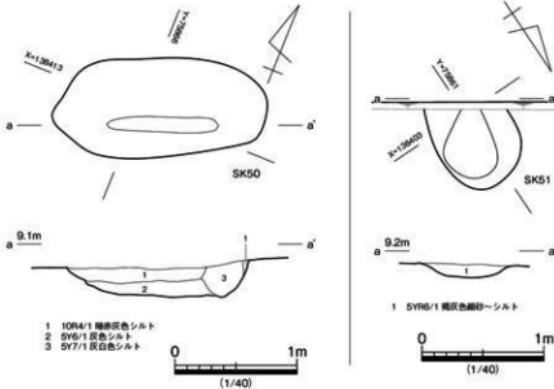
10区南東隅部で検出した土坑である。南半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。東西0.67m、南北0.70m以上、平面形は隅丸長方形を呈するとみられる。残存深は0.12mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は褐灰色細砂～シルトの単層であった。

遺物は、土師質土器皿等の小片5点と焼土塊が出土したのみである。

SK52（第70図）

10区南東隅部で検出した土坑である。南半部をSD06に切られるため、全形は不明。SD06より先行する。南北0.78m以上、東西0.99m、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。残存深0.19mを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿等の小片10点が出土したのみである。



第69図 SK50（左）・SK51（右）平・断面図

SK53（第70図）

10区南東隅部で検出した土坑である。南端部は調査区外へ延長するが、概ね全形は判断できる。南北0.5m以上、東西0.57m、平面形は梢円形を呈するとみられる。残存深は0.56mを測る。平・断面形状より、柱穴の可能性も考えられるが、建物遺構は復元されず、土坑として報告する。埋土は褐灰色細砂～シルトの単層であった。

遺物は、須恵器や土師質土器杯、瓦器等の小片が10点程度出土した。**396・397**は土師質土器杯である。

SK54（第71図）

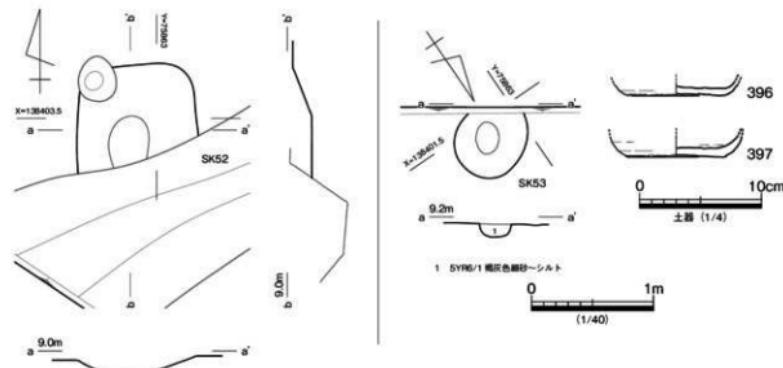
10区南東隅部で検出した土坑である。東半部をSD02に切られるため、全形は不明。SD02より先行する。東西1.02m以上、南北0.89m以上、平面形は安定した形状を呈さない。残存深は0.08mと浅い。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、器種不詳の土器小片1点が出土したのみであり、時期を特定する資料に欠けるが、遺構の重複関係等より、当該時に位置付けられるものと考える。

SK55（第72図）

10区東端部、8区との境界付近第2面で検出した土坑である。西半部はSK48に切られ、全形は不明である。切り合い関係より、SB04、SD27より先行する。東西2.07m、南北1.48m以上、主軸方向はN 36.32°Eに配され、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.68mを測り、断面形は碗底状を呈する。埋土は褐灰色シルト～細砂の単層であった。

遺物は、弥生土器甕、須恵器高杯、土師器皿、土師質土器皿・杯・碗、瓦器碗等の小片約70点のほか、鉄釘や鉄滓が出土した。**398**は土師質土器皿、**399・400**は同碗である。佐藤編年中世I・3期か。**401**は古代に遡る土師器皿で、内外面ベンガラにより赤色塗彩する（第4章参照）。**402**はやや焼成不良の



第70図 SK52（左）・SK53（右）平・断面・出土遺物実測図

須恵器脚部片。低脚高杯と思われるが、別の器種の可能性もある。この2点は混入資料と考える。403は鉄釘の頭部小片である。

SK56（第73図）

8区北西部第2面で検出した土坑である。切り合い関係により、SK57より後出する。東西1.27m、南北0.82m、主軸方向はN 71.63°Wに配され、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.25mを測り、断面形は碗底状を呈する。埋土中にはやや多量のベース層ブロック土や拳大程度の砂岩被熱礫が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、土師質土器皿や須恵器、土師質土器皿、黒色土器碗等の小片約70点のほか、鉄滓が若干量出土した。404は土師質土器皿。405は同杯である。409は土師器壺、407は同壺等の高台部小片、406・408は黒色土器碗で、いずれも古代に遡る混入資料である。

SK57（第74図）

8区北西部で検出した土坑である。北半部をSK56に切られ、全形は不明である。SK56より先行する。南北0.90m以上、東西0.79m、主軸方向はN 24.14°Eに配され、平面形は整った隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.13mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土中には多量のベース層ブロック土が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、土師質土器皿等の小片4点が出土したのみである。

SK58（第74図）

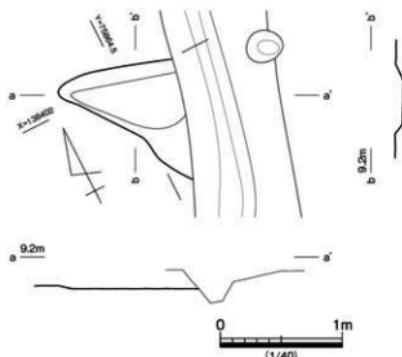
8区北西部第2面で検出した土坑である。南北1.31m、東西0.92m、平面形は不整形形を呈する。残存深は0.08mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土中には多量のベース層ブロック土が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器の小片6点が出土したのみである。

SK59 (第74図)

8区北西部第2面で検出した土坑である。東西1.06m、南北0.54m、主軸方向N 67.26°Wに配され、平面形は整った隅丸方形を呈する。残存深は0.06mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色粗砂質土の単層で、自然堆積層と考えられる。

遺物は、完形の青白磁合子1点のほか、土師質土器皿等の小片約15点が出土した。412は菊座状の体部に受け部が付す、型造りの青白磁合子の身で、外底面には「浜家合子尺」の刻印を認める。



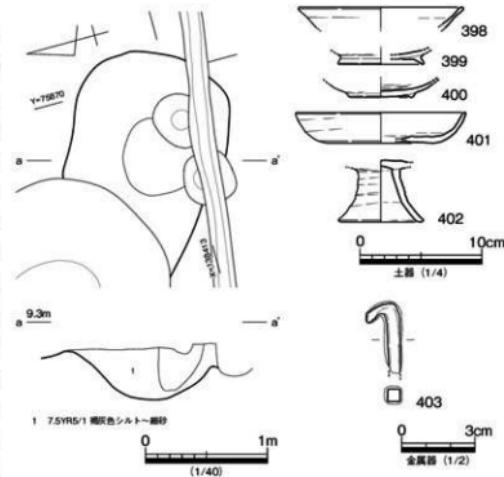
第71図 SK54 平・断面図

SK60 (第75図)

8区中央北半部で検出した大型土坑である。SD27と重複し、切り合ひ関係より先行する。南北2.05m、東西1.69m、平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.15mと平面規模の割に浅く、周壁は直に近く掘り下げられ、底面は概ね平坦で、断面形は箱形を呈する。埋土は2層に細分された。下層は褐灰色粗砂質土の均質な埋土で、人為的な置土の可能性が考えられる。本層上面は浅く皿状に窪み、中央部上面は被熱によりやや強く赤変し、上面には薄い炭化物層が堆積していた。何らかの焼成造構の可能性が考えられるが、用途は特定できなかった。上層

は炭化物や焼土小塊を含む灰黄色粗砂質土で、基本的には灰層と考える。

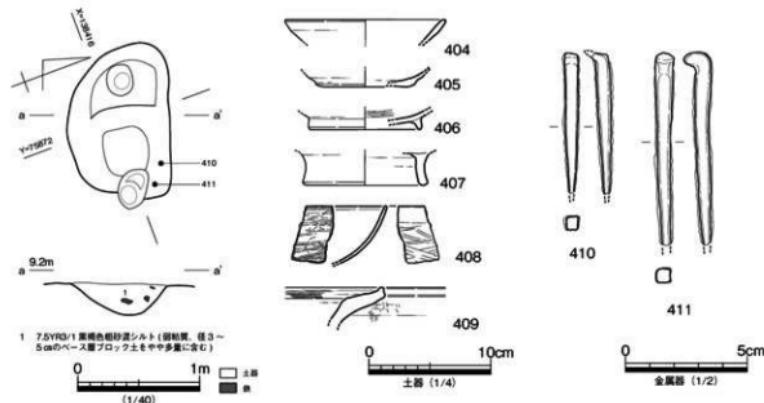
遺物は、須恵器杯、土師器壺、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器碗等の小片が約100点出土した。413～416は土師質土器皿、417・418は同杯である。419・420は黒色土器碗。421は灰釉陶器碗。



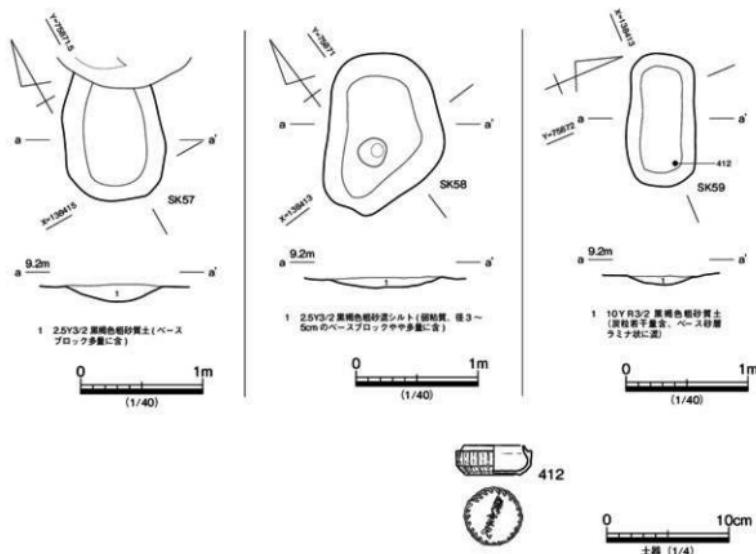
第72図 SK55 平・断面・出土遺物実測図

SK61 (第76図)

8区東南部第1面で検出した浅い落ち込みである。北半部は調査区外へ延長し、全形は不明。切り合ひ関係より、SD05より後出す。東西5.54m、南北1.18m以上、主軸方向はN 76.83°Wに配され、平面形はやや歪な隅丸長方形を呈するとみられる。残存深は0.10mを測り、断面形は浅い皿状を呈



第73図 SK56 平・断面・出土遺物実測図



第74図 SK57(左)・SK58(中)・SK59(右) 平・断面・出土遺物実測図

し、底面には起伏が顕著に認められた。埋土は褐灰色粗砂質土の単層であった。

遺物は、土師質土器等の小片がコンテナ1/2箱程度出土した。土師質土器皿・杯等の供膳具の比重が高い。**424・425**は古墳時代前期の古式土器小型丸底土器。ほぼ同形・同大で、製作技法も共通しており、同一作者の作品と考えてもよい資料である。**423**は小型丸底土器の近くより出土した古式土器器

壺底部とみられる
小片。これらはい
ずれも混入資料で
ある。422は土師
質土器皿である。

SK62（第77図）

8区北東部で検出
した土坑である。
東西0.95m、
南北0.29m、残
存深0.22m、平面
形はL字状を、
断面形はU字状を
それぞれ呈する。
埋土は黒褐色粗砂
質土の単層で、多
量の炭化材や焼土
細粒を含む。遺構周辺に被熱痕は認められず、投棄されたものと考えられる。

遺物は、土師質土器皿等の小片7点が出土したのみである。

SK63（第77図）

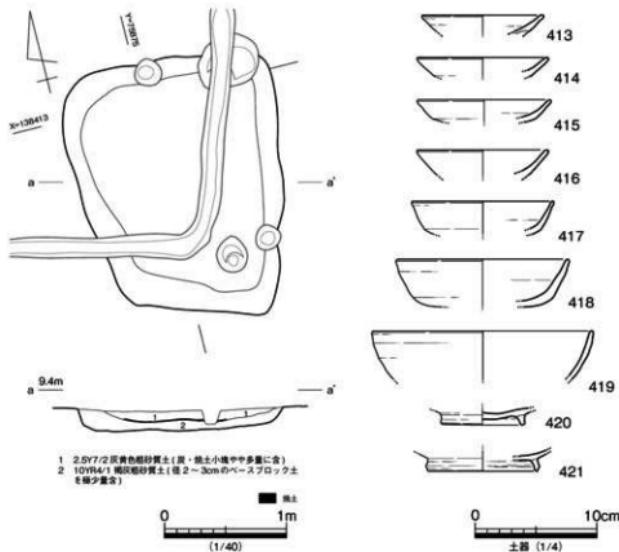
8区北東部で検出
した土坑である。南北2.30m、東西0.77m、残存深0.10m、平面形は歪に屈曲し
た長楕円形、断面形は皿状をそれぞれ呈する。埋土は黒褐色粗砂質土の単層で、ベース層ブロック土
を多量に含むことから、人為的な埋戻しの可能性が高く、廃棄土坑と考える。

遺物は、土師質土器皿や瓦器等の小片約40点と焼土塊、鉄滓が少量出土したのみである。

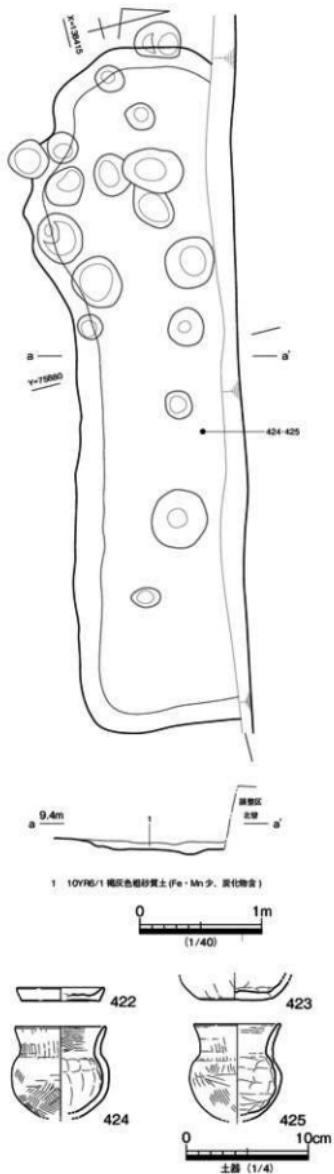
SK64（第78図）

8区中央東端部で検出
した土坑である。SK66と重複し、切り合い関係より先行する。東西0.94m、
南北0.64m、主軸方向N78.41°Wに配され、平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.34mを測り、
断面形は椀底状を呈する。埋土は3層に細分された。下層は破碎した土器小片を含む灰黄褐色粗砂質土
で、流入土と考えられる。土坑開削後一定期間オープンな状況で放置されていた可能性がある。中層は
ブロック土を多量に含み、人為的な埋戻し土と考えられ、本層中より完形の土師質土器杯2点を含む多
量の遺物が出土した。当初は人為的に埋められた土器埋納遺構の可能性も考えたが、小片化している土
器も多くあり、遺物の出土状況に規則性は認められず、埋土の堆積状況からも、廃棄土坑と判断した。
上層は、土坑埋戻し後に生じた窪みを埋める自然堆積層である。

遺物は、土師質土器杯18個体（うち完形品2点）と、杯以外の土師質土器小片数点が出土した。



第75図 SK60平・断面・出土物実測図



第76図 SK61 平・断面・出土遺物実測図

426～443は土師質土器杯、444は同碗である。このうち、接合はしないが428と429、434と435は、それぞれ同一個体の可能性があり、437・439はほぼ完形品である。また443は内面の一部に煤が付着し、燈明皿として使用した可能性がある。出土した杯は、ほぼ酷似した素地粘土を使用し、調整技法も共通し、法量に若干の誤差を認めるものの、製作地や時期を同じくするものと考えられる。

SK65（第79図）

8区中央東半部第1面で検出した大型の土坑である。切り合い関係より、SK01、SD05より後出する。南北558m、東西1.59m、主軸方向N 20.24°Eに配され、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.37mを測り、東西方向の断面形は碗底状を呈する。また、南北両端には、幅約0.7～0.9mの浅いテラスが付し、中央部がやや深く掘り込まれる。埋土は暗灰黄色粗砂質土の単層で、ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

445～448は土師質土器皿、450～459は同杯。459は完形品に近い。457の内面下半部は黒色化しており、墨等の容器として使用された可能性が考えられる。449は和泉型瓦器皿である。460は土師器直口壺、461は同高杯で、いずれも古墳前期に遡る混入資料である。

SK67（第80～83図）

8区中央南端で検出した大型の土坑で、後述する埋土の堆積状況より、当初は水溜状の機能を有して開削された可能性が考えられる。南半部は調査区外へ延長し、全形は不明。東西7.0m以上、南北4.27m以上、平面形はやや歪な円形を呈するとみられる。残存深は1.02mを測り、断面形は碗底状を呈する。ベース砂層を0.8m掘り抜いており、調査時にも顯著な湧水が認められた。

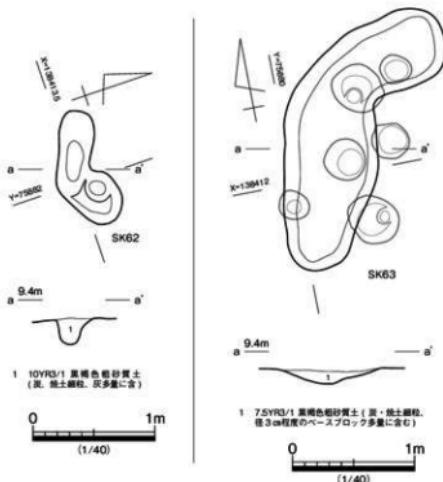
埋土は9層に細分され、4層に大別して遺物の取り上げを行った。下層（7～9層）は、グライ化した灰色系粘土と粗砂のラミナ堆積層で、造機能時の滯水下堆積と考える。中層（3～6層）は疊やブロック土を含む砂質土で、北より南へ傾斜して堆積しており、造構廃絶時

に北側から人為的に埋め戻された土層と考えられる。上層（2層）は、中層上面より再度開削された遺構に伴う埋土で、本層も南へ傾斜するラミナ堆積が認められ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。最上層（1層）は、埋土上面をほぼ水平に均した後に堆積し、ブロック土をやや多量に含むことから、遺構上面の窪地を最終的に埋める整地土と考えられる。

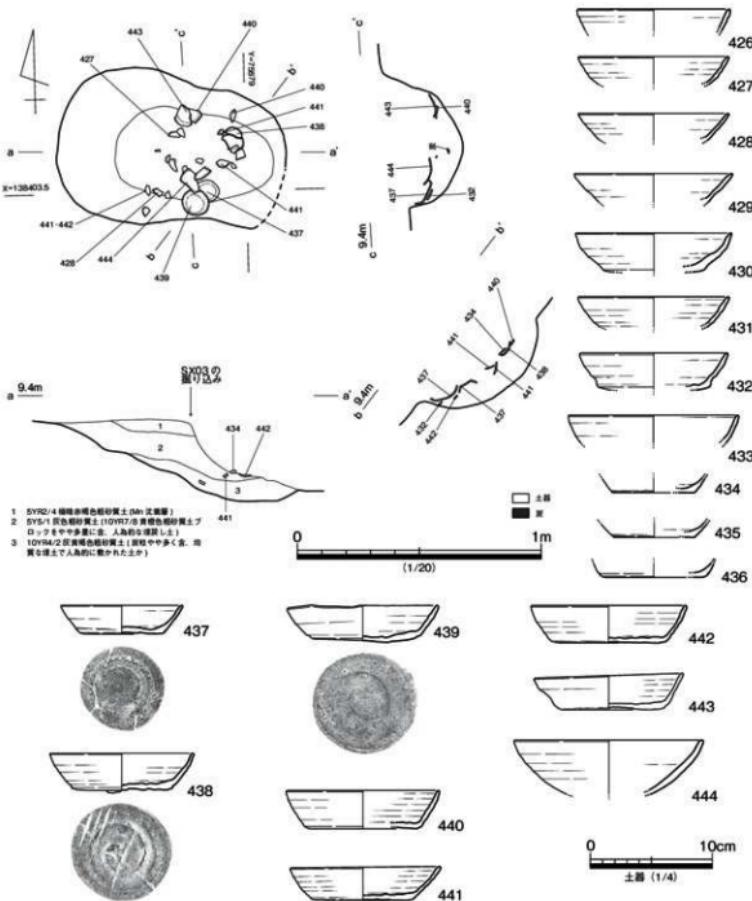
遺物は、コンテナ2箱程度出土した。図示した以外に、サヌカイト剥片や片岩碎片、砂岩や花崗岩の被熱礫、多量の鉄滓等がある。463～473は土師質土器皿。471・472は完形品である。474～493・495～504は同杯。486・489・495は内外面の一部、491・502は内面、478・483・496・504は外面にそれぞれ煤が付着する。494は同碗。518～522は同足釜。522は底部外面に格子タタキが施されるが、本遺跡では少数派である。516・517は同鍋である。いずれも外面に煤が付着する。515は同鉢で、口縁端面から内面、一部破断面に煤が付着し、破損後転用されたためか、被熱を蒙る。516は佐藤編年中世II-5期前後、517・521・522は楠井編年第II期第2～3段階か。524は同羽釜。体部外面には煤が付着する。525は同擂鉢。破断面を含め、内外面に煤が付着する。511・512は東北系の黒色土器杯。混入資料であろう。505は和泉型瓦器碗。小片化し磨滅が顕著であり、混入の可能性がある。514は、古瀬戸碗か。下端破断面の一部に漆雜ぎの痕跡を認める。508は白磁碗IV類。507は口縁端部内面の釉を掻き取り、口禿げとするもので、白磁碗IV類とみられる。506は白磁皿VIもしくはVII類である。509は龍泉窯系青磁碗II-c類。510は同安窯系青磁碗II類。526は備前焼擂鉢で、内面体部下半は使用により磨滅する。乘岡編年中世3期か。523は瓦質土器甕である。531は土師質の棒状土錐小片である。530は用途不明の土師質の土製品である。長さ3.9cm以上、幅1.7cm、厚さ1.2cmのやや扁平な棒状を呈し、図下端面より径0.3cmほどの円孔が穿たれる。529は土師質のフイゴ羽口先端部の小片である。端部外面には厚く砂礫を含む鉄滓が付着する。528は土師質の平瓦小片。凹凸両面に多量の離れ砂を認める。513は焼成不良の須恵器杯、527は須恵質の布目平瓦片で、いずれも古代に遡る混入資料である。545～547はいずれも砂岩製砥石である。547は現状で砥面は1面のみ、545は同2面が確認できる。いずれもその他の面は破損し、また被熱による変色を認める。546は上面と両側面の3面を使用し、上下両端は欠損する。532～543は角釘片、544は不明鉄器である。

出土遺物より、14世紀後葉を中心とした時期と考えられる。

なお、本遺構中・下層の土壤について、珪藻分析と花粉分析を実施した。分析の詳細は第4章に掲載する。珪藻分析の結果から、いずれも淡水生種が多数を占め、中層では陸生珪藻が多く、下層では流水不定性種が多数を占める結果となった。これは、上述した埋土の由来に起因するものと考えられ、とく



第77図 SK62(左)・SK63(右) 平・断面図

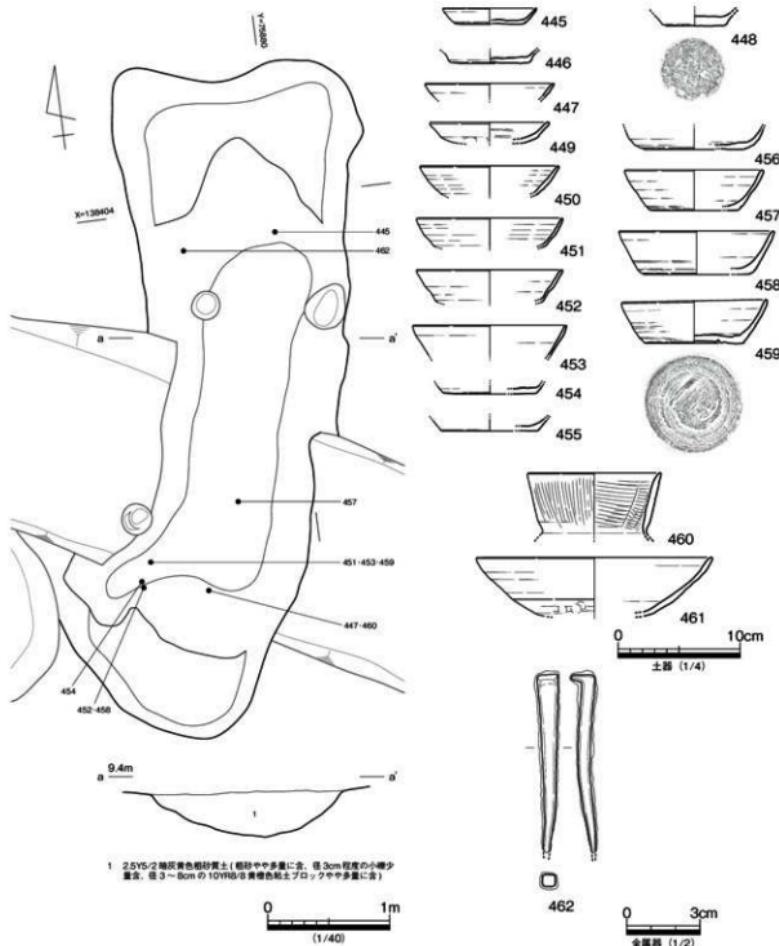


第78図 SK64 平・断面・出土遺物実測図

に本遺構機能時の堆積層である下層から流水不定性種が多く検出されたことから、本遺構が湧水を水源とする出水遺構で、調査区外で溝に連絡して、屋敷地内の排水・乾燥地化と、灌漑等に利水されていた可能性も想定される。

SK68（第84図）

11区北西隅部で検出した土坑である。南北部は調査区外へ延長し、全形は不明である。東西1.30m、南北1.13m以上、平面形は整った隅丸方形を呈するとみられる。残存深0.18mと浅く、断面概ね逆台形状を呈し、底面で西辺に浅いテラスが付す。埋土は暗灰黄色粗砂質土の単層であった。

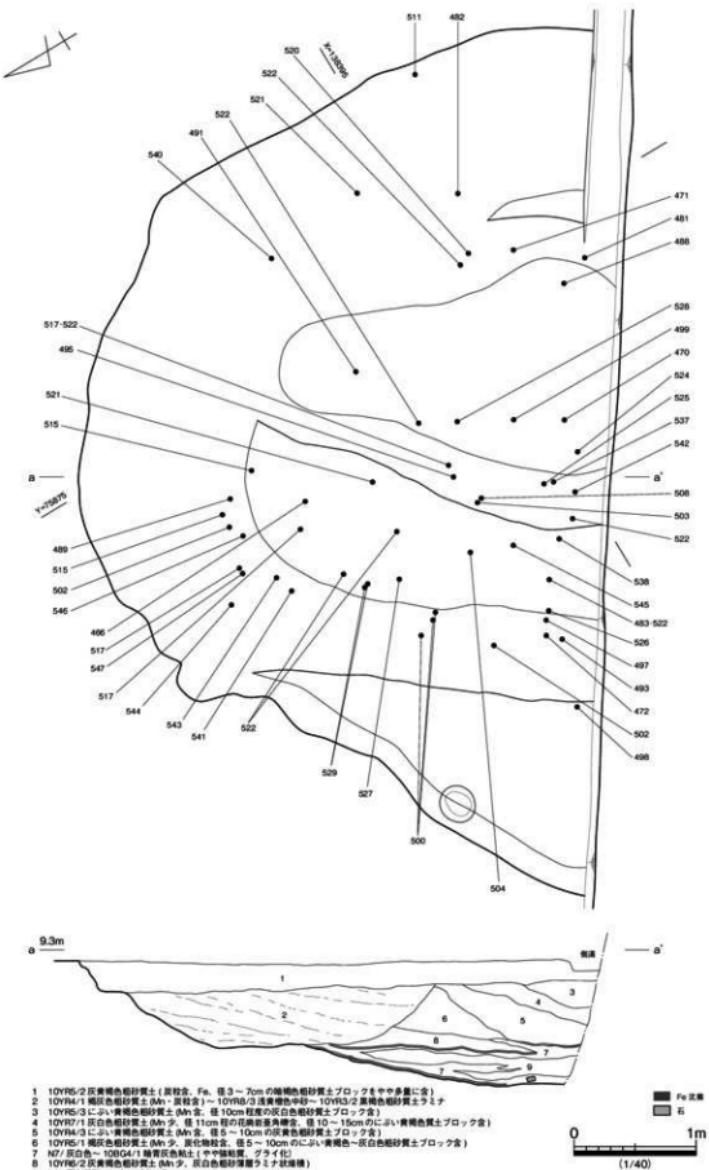


第79図 SK65 平・断面・出土遺物実測図

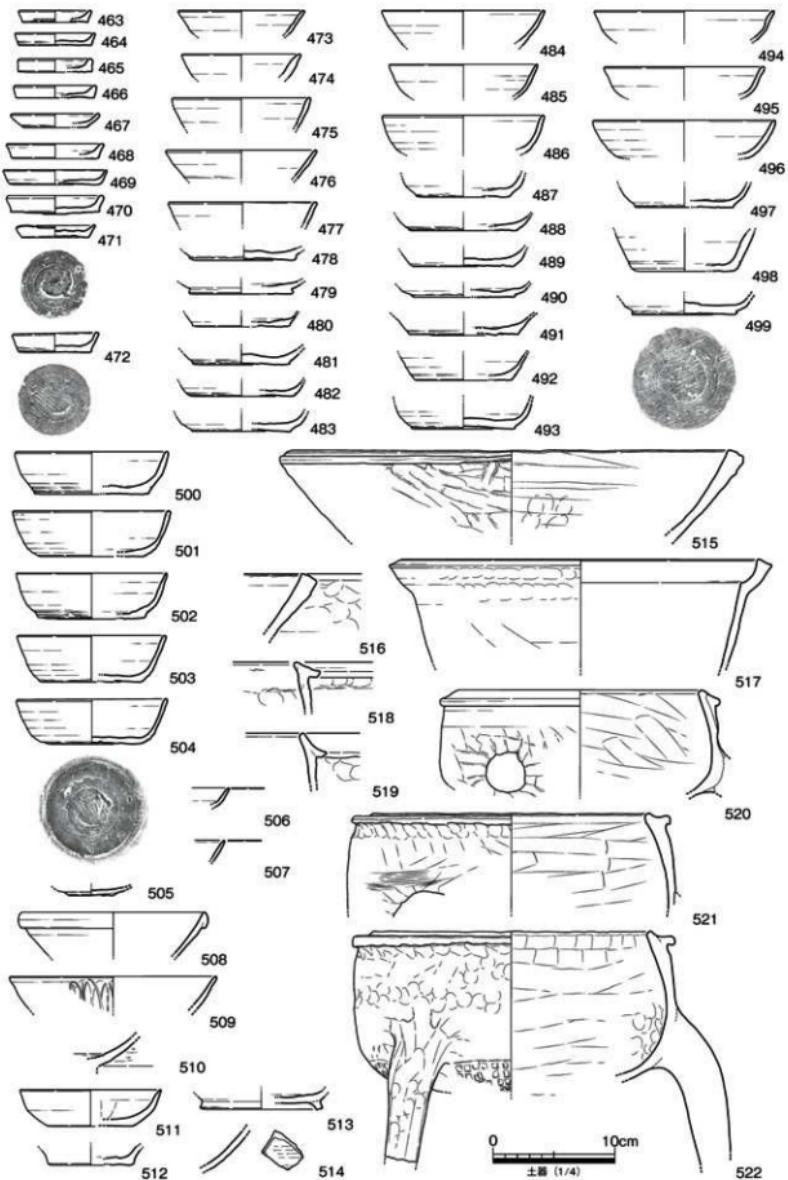
遺物は、土師質土器や瓦器の小片約15点のほか、サヌカイト剥片等が出土した。

SK69（第84図）

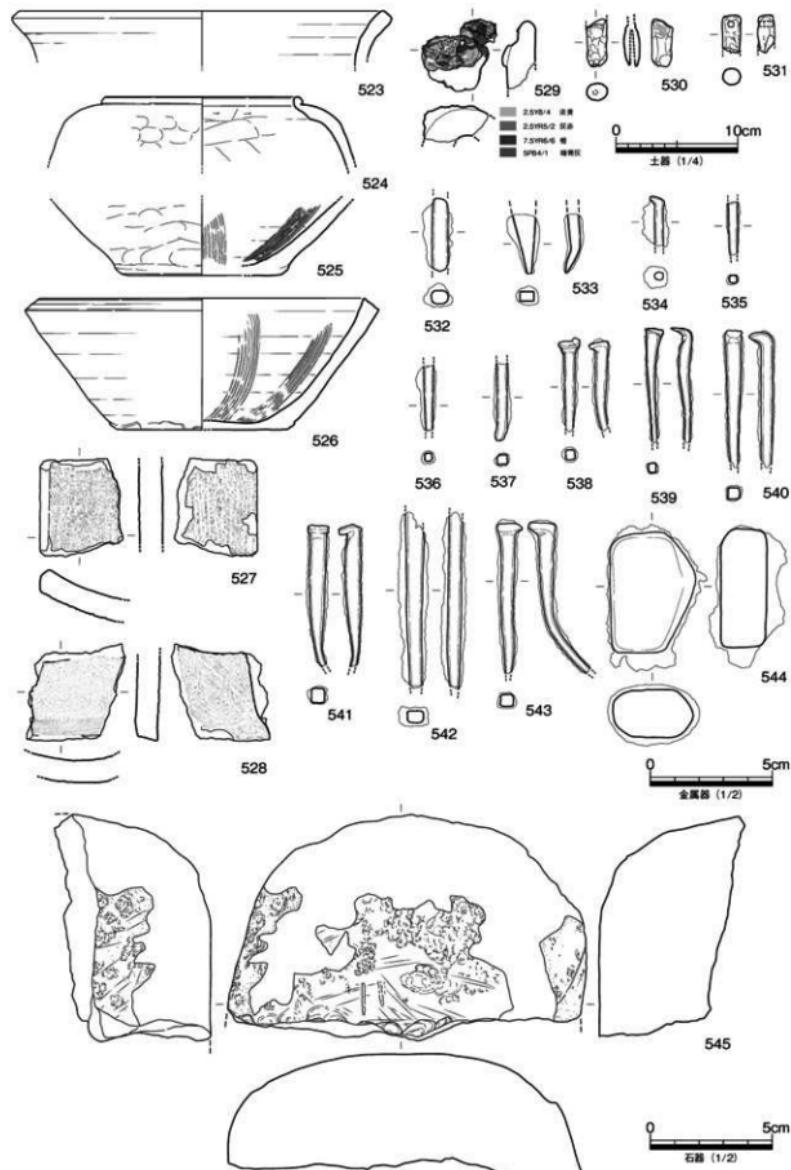
3区北端で検出した土坑である。上面より小穴SP661が掘り込まれ、また溝SD35を切る。平面形は、南北1.27m、東西0.83mを測り、やや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.39mであった。また、上面をほぼ水平に据え置いた、砂岩等の亜角礫～亜円礫4石が重なって出土した。埋土等は記録化されてお



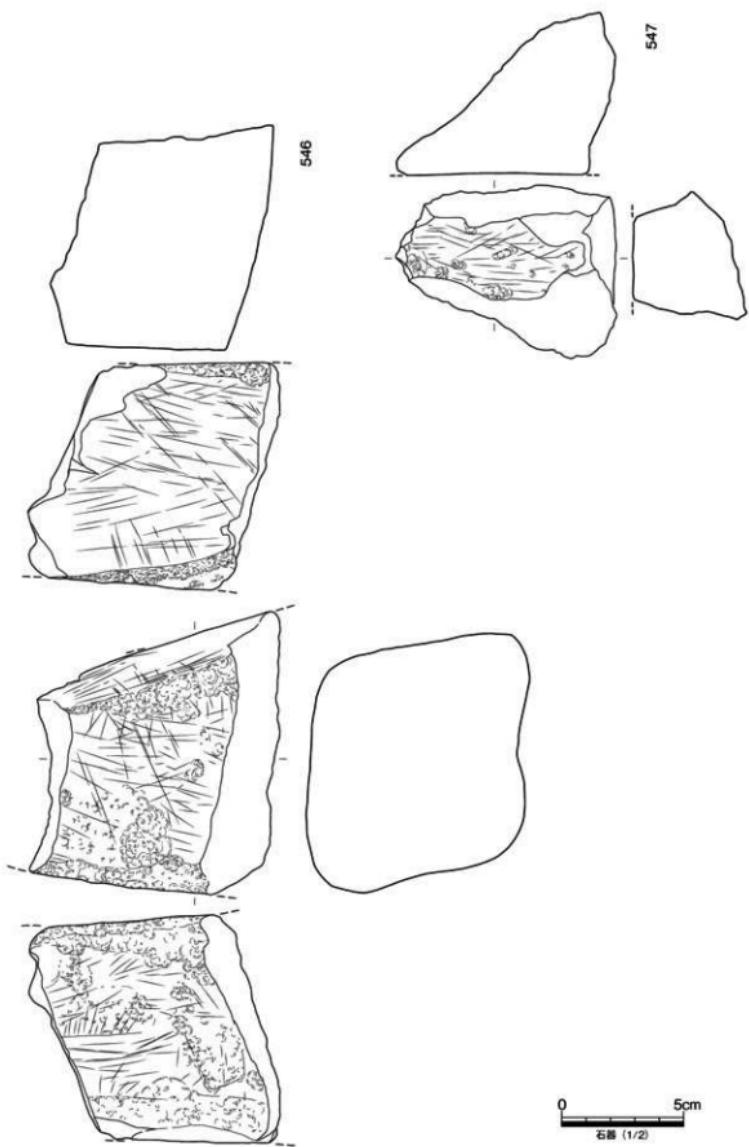
第80図 SK67平・断面図

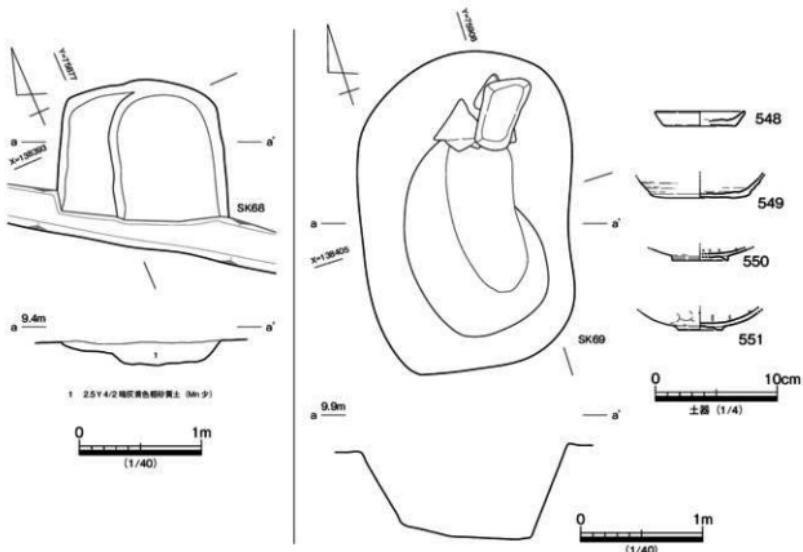


第81図 SK67出土遺物実測図1

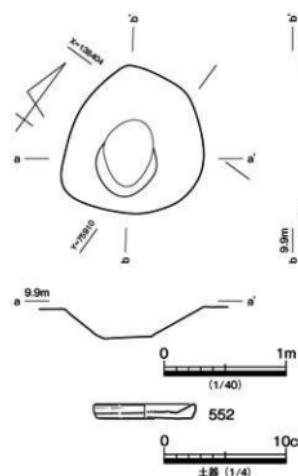


第82図 SK67出土遺物実測図2





第84図 SK68(左)・SK69(右) 平・断面・出土遺物実測図



第85図 SK70 平・断面・出土遺物実測図

ららず不明である。

遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯、土師質土器皿 548・同杯 549・同碗、和泉型瓦器碗 550・551 等の小片 50 点のほか、角疊凝灰岩小疊 2 点が出土した。SK69 は、12世紀末～13世紀前葉か。

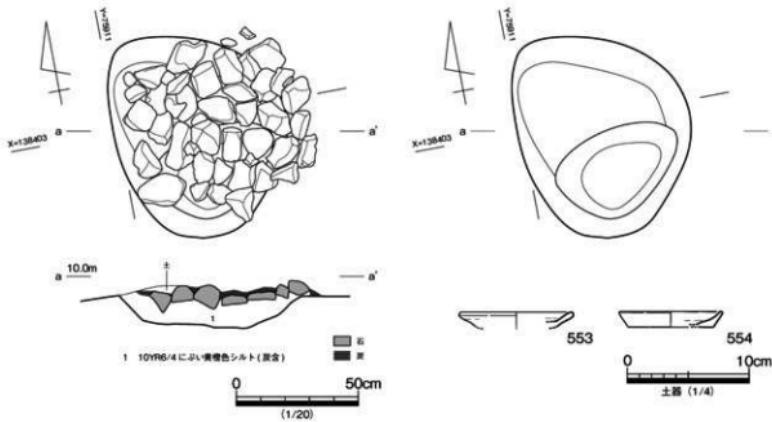
SK70(第85図)

3区北端で検出した土坑である。SD12と重複し、切り合ひ関係より後出する。平面形は、東西1.16m、南北1.17mの歪な円形を呈する。残存深は0.25mであった。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

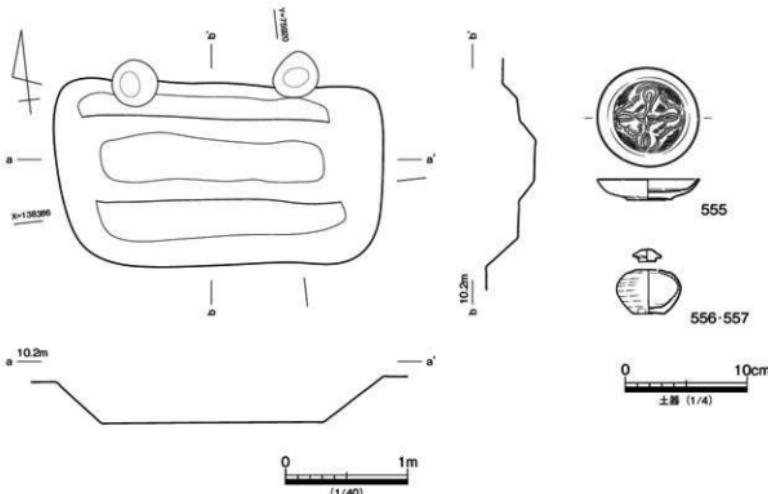
遺物は、須恵器、土師質土器皿、瓦器等の小片が16点出土したのみである。552は土師質土器皿である。

SK71(第86図)

3区北端で検出した集石土坑である。平面形は、長軸0.83m、短軸0.68mのやや歪な梢円形を呈する。残存深は、集石上面より0.18mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。集石は、まず土坑底面に、にぶい黄橙色シルトを約10cmの層厚で置き、その上面の南北約0.7m、東西約0.75mのはば矩形の範囲に、長径



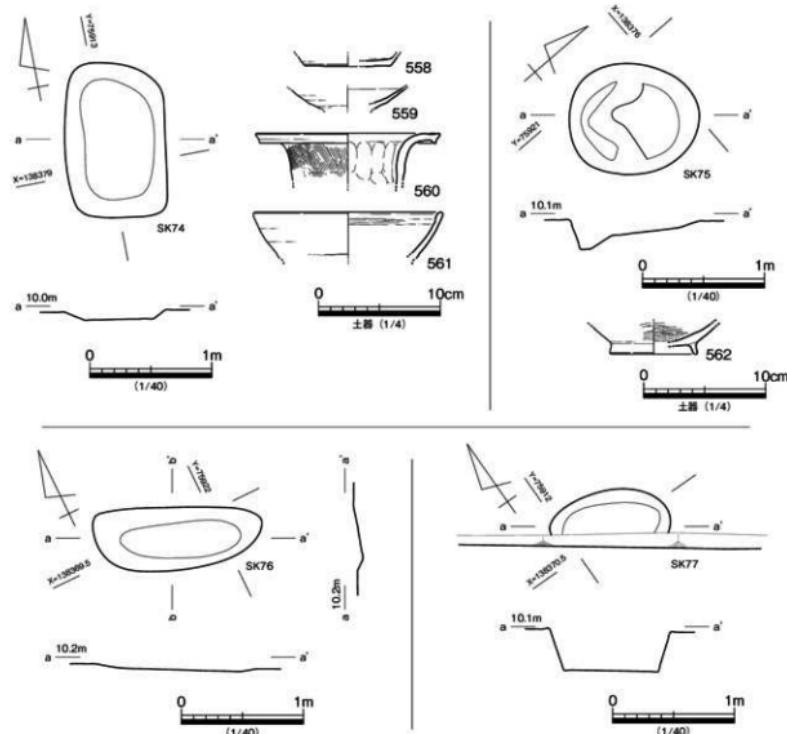
第86図 SK71 平・断面・出土遺物実測図



第87図 SK72 平・断面・出土遺物実測図

5～20cm程度の砂岩等の亜円～亜角礫が、ほぼ上面を水平に揃えて据え置かれていた。集石上面や石材の間隙には薄く炭化物層が堆積する。なお、集石上面で遺構を検出したため、炭化物層上位の堆積層等は不明である。検出時の写真より、集石の一部には、被熱によるとみられる変色が認められ、集石上面で燃焼行為がなされた可能性がある。第5章で詳述するように、類例の検討より火化遺構の可能性が考えられる。

遺物は、土師質土器皿 553・554 や瓦器等の小片が 17 点出土したのみである。



第88図 SK74（左上）・SK75（右上）・SK76（左下）・SK77（右下）平・断面・出土遺物実測図
SK72（第87図）

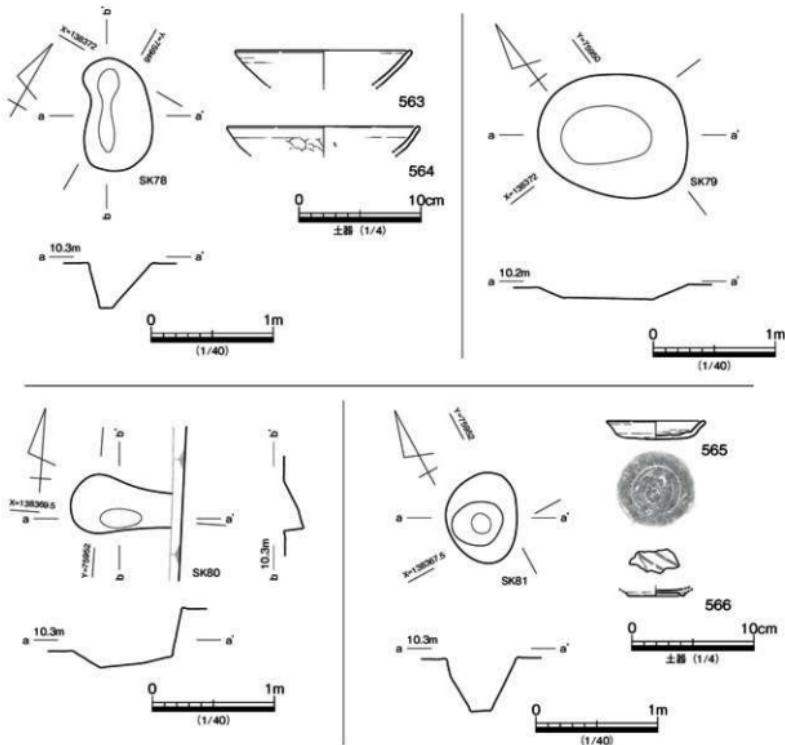
1区と3区の調査区で検出した土坑である。小穴2基と重複し、切り合い関係より先行する。平面形は、東西2.63m、南北1.46mの隅丸長方形を呈する。残存深は、中央部がやや深く掘り込まれ0.42mであった。埋土等の情報は記録化されていないため不明である。

遺物は、図示した以外に土器小片5点が出土したのみである。白磁皿555は、小さな高台を有する浅い皿で、高台内の釉は搔き取る。また、内面見込みに竈と櫛により十字花状の文様を描く。557は無頭の古瀬戸合子で、底部を除く外面と内面に灰釉をかける。556は同蓋で、頂部は緩やかな山形を呈する。藤澤編年古瀬戸前IV期とみられる。

SK74（第88図）

1区中央で検出した土坑である。平面形は、長軸1.23m、短軸0.80mの整った隅丸長方形を呈する。残存深は0.18mである。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器壺や土師質土器杯等の小片が9点出土したのみである。560は、弥生時代終末期に



第89図 SK78（左上）・SK79（右上）・SK80（左下）・SK81（右下）平・断面・出土遺物実測図

位置付けられる広口壺。561は、古墳時代前期後半に位置付けられる布留系甕口縁部。いずれも混入資料である。558は土師質土器杯。559は白磁皿で、釉はくすんだ黄みを帯びており、広東系の製品の可能性がある。

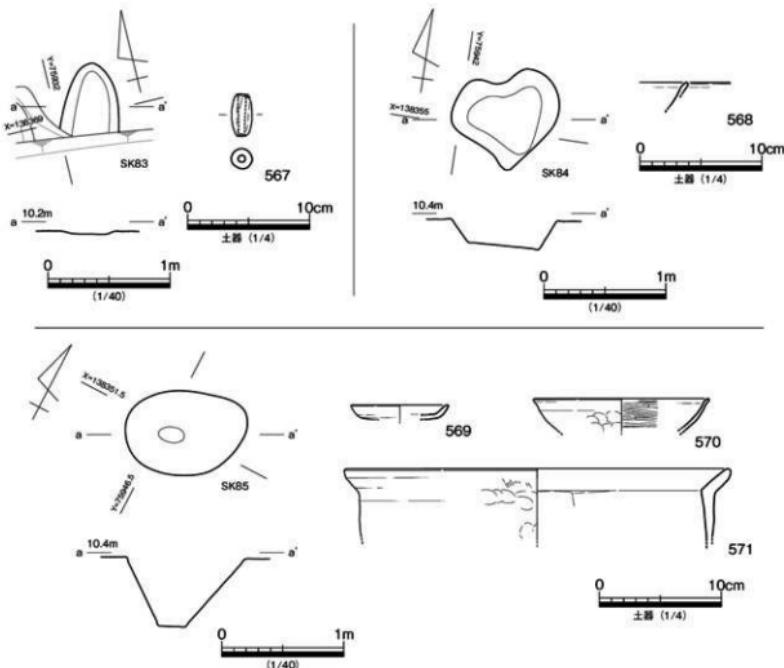
SK75（第88図）

1区中央東半で検出した土坑である。長軸1.06m、短軸0.89mの平面楕円形を呈する。残存深は0.15mである。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師式土器杯・碗、黒色土器、瓦器等の小片13点が出土したのみである。562は土師質土器碗。内面は入念なミガキ調整が施される。11世紀後半に属し、混入資料の可能性がある。

SK76（第88図）

1区南東隅部で検出された土坑である。長軸1.36m、短軸0.50mの平面長楕円形を呈する。残存深



第90図 SK83(上左)・SK84(上右)・SK85(下) 平・断面・出土遺物実測図

は0.12mである。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、瓦器小片1点が出土したのみである。

SK77(第88図)

1区中央南端で検出した土坑である。南半部は調査区外へ延長するため、全形は不明。長軸0.98m、短軸0.35m以上の平面梢円形状を呈するとみられる。残存深は0.35mである。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器と黒色土器の小片各1点が出土したのみである。

SK78(第89図)

4区北東部で検出した土坑である。長軸0.9、短軸0.54mの平面歪な梢円形状を呈する。残存深は0.34mであった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器杯、瓦器碗等の小片8点のほか焼土塊小片4点が出土した。**563**は土師質土器杯。**564**は和泉型瓦器碗である。尾上編年Ⅲ・3期前後。

SK79（第89図）

4区北東部で検出した土坑である。長軸1.2m、短軸0.98mの平面やや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.12mであった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器皿等の小片4点が出土した。

SK80（第89図）

4区東端で検出した土坑である。東端は調査区外へ延長するため、全形は不明である。現状で、長軸0.82m以上、短軸0.45mの平面長楕円形状を呈する。残存深は0.16mであった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、須恵器、土師質土器皿・杯、瓦器、白磁碗等の小片10点が出土した。

SK81（第89図）

4区東端で検出した土坑である。長軸0.72m、短軸0.55mの平面楕円形状を呈する。残存深は0.46mであった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器皿・杯、瓦器等の小片18点が出土した。**565**は完形の土師質土器皿。**566**は和泉型瓦器碗の小片である。尾上編年Ⅲ-2～3期とみられる。

SK83（第90図）

2区南西部SH01北東隅で検出した土坑である。南北部を搅乱により壊され、全形は不明である。現状で、南北0.54m以上、東西0.45mの平面楕円形状を呈する。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器等の小片数点が出土したのみである。**567**は小型の管状土錐で、ほぼ完形品である。

SK84（第90図）

2区南東部で検出した土坑である。東西0.88m、南北0.81m、平面不定形で、残存深は0.31mを測る。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器皿**568**・杯等の小片6点が出土した。

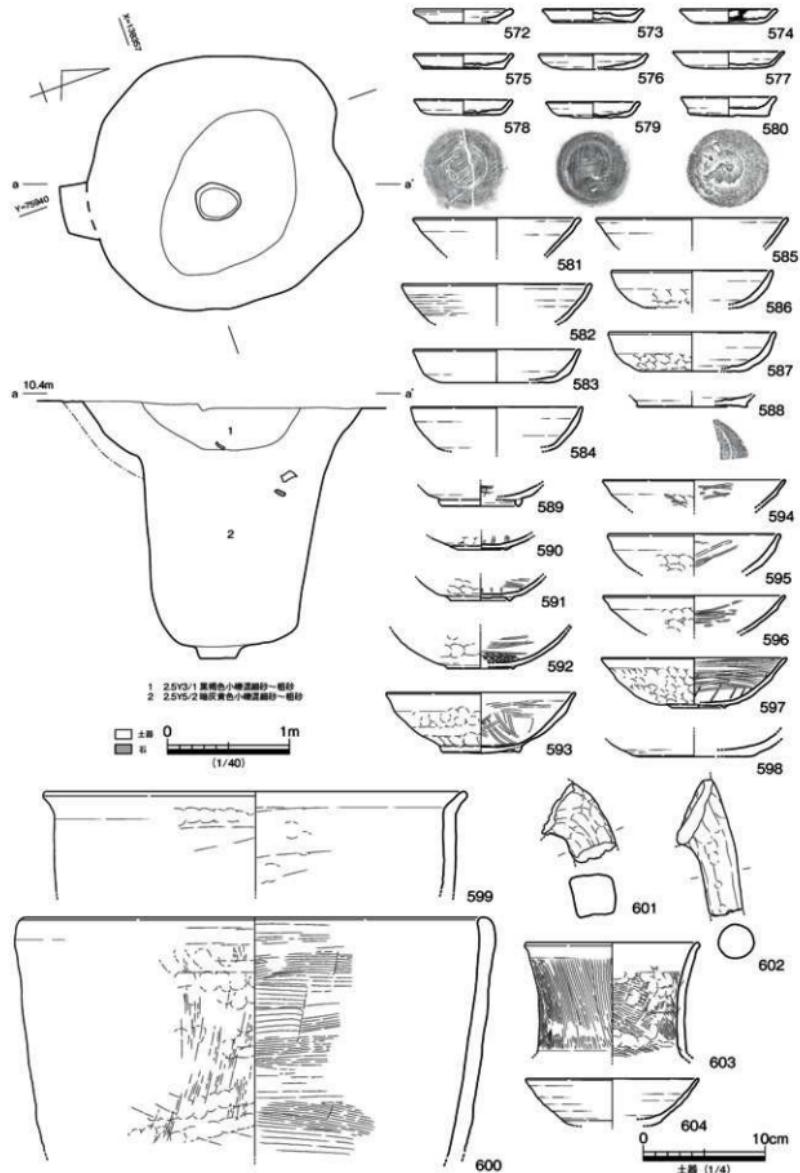
SK85（第90図）

2区南東隅部で検出した土坑である。長軸0.95m、短軸0.65m、平面形は楕円形を呈する。残存深は0.57mであった。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

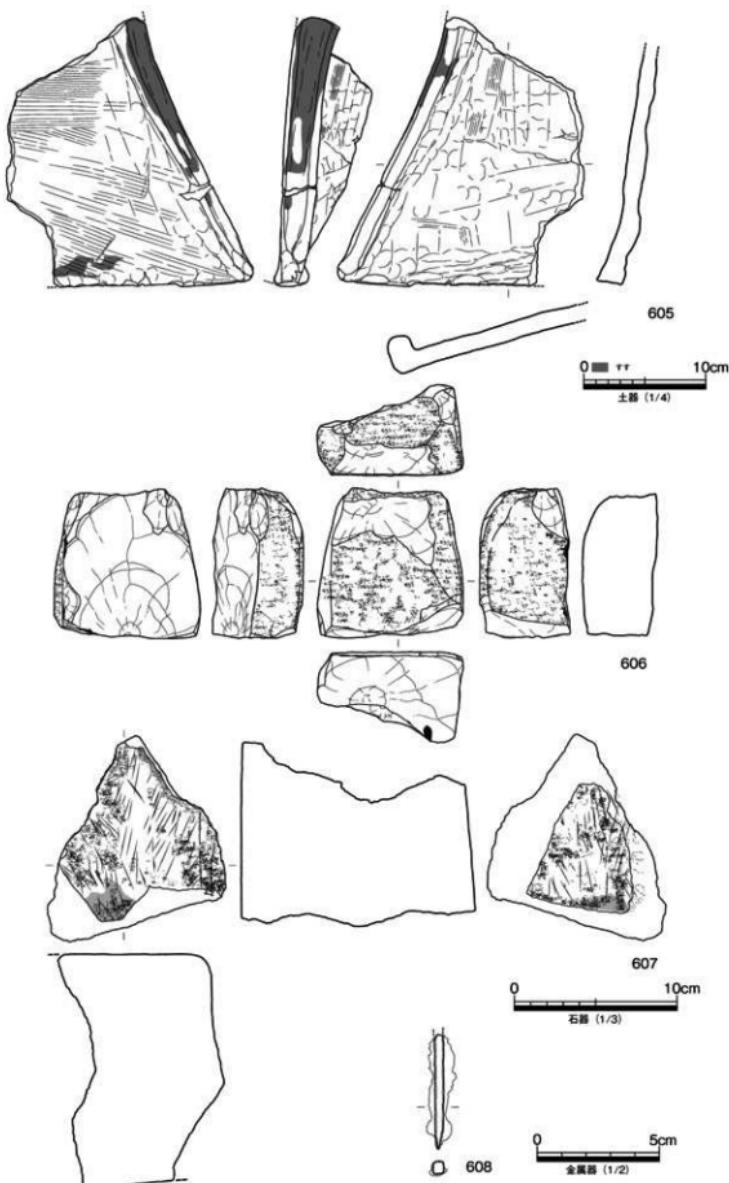
遺物は、須恵器、土師質土器皿・杯・鍋、黒色土器、瓦器、焼土塊等が約100点出土したが、大半は器種不詳の土器小片であった。**569**は土師質土器皿、**570**は和泉型瓦器碗である。**571**は土師器壺で、11世紀中葉～12世紀前葉に属し、混入資料であろう。

井戸**SE01（第91・92図）**

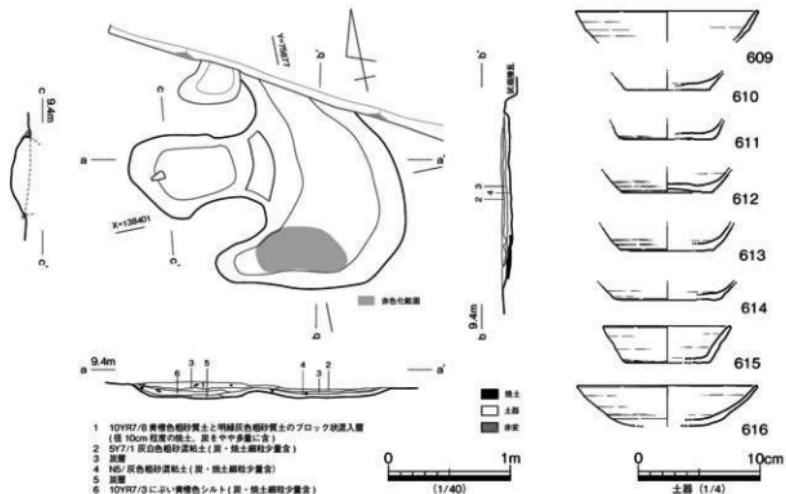
2区東半部で検出した素掘りの井戸である。平面形は、南北2.08m、東西2.11mのやや歪な矩形を



第91図 SE01 平・断面・出土遺物実測図1



第92図 SE01出土遺物実測図2



第93図 SF01 平・断面・出土遺物実測図

呈する。残存深2.12mと深く、上位0.3mは緩やかに、それ以下は直に近く掘り込まれ、断面形は概ね箱状を呈する。また底面は平坦で、中央に小ピットが配される。埋土は2層に細分され、いずれも細～粗砂が堆積する。

遺物量は多く、土師質土器皿・同碗・同足釜、瓦器碗、東播系須恵器、青磁碗、焼土塊、サヌカイト石核、砥石、砂岩被熟礫、鉄釘、鉄滓等がコンテナ1箱出土した。577・579・581・582・584・587・592・593・595・599・600・604～607は下層より出土したが、その他の遺物の出土層位は不明である。572～580は土師質土器皿である。578～580は完形もしくはほぼ完形に復元される資料であり、井戸廃絶に伴う祭祀的な意味合いを持つ資料の可能性がある。また574の口縁部内面の一部に煤が付着し、燈明皿として使用された可能性が考えられる。581～587は土師質土器杯。588も杯の可能性があるが断定できない。底部は本遺跡では少數の回転糸切り調整とみられる。589は土師質土器碗。593は十瓶山周辺窯産須恵器碗。佐藤編年中世II-1期。594～597は和泉型瓦器碗。尾上編年III-1～III-3類か。601・602は土師質土器足釜の脚部小片である。601の脚部は断面矩形を呈し、県内の同時期の足釜には類例が乏しい。600は土師質土器火鉢。内面には上半部を中心に煤が付着する。また胎土中に雲母粒を多量に含み、搬入品の可能性がある。598は東播系須恵器片口鉢の底部片。603は弥生時代後期の直口壺。604は古墳時代前期の古式土器高杯。605は古代の土器壺。比較的大型の破片だが、603同様混入資料であろう。599は12世紀前葉に属する土器壺で、これも混入資料であろう。

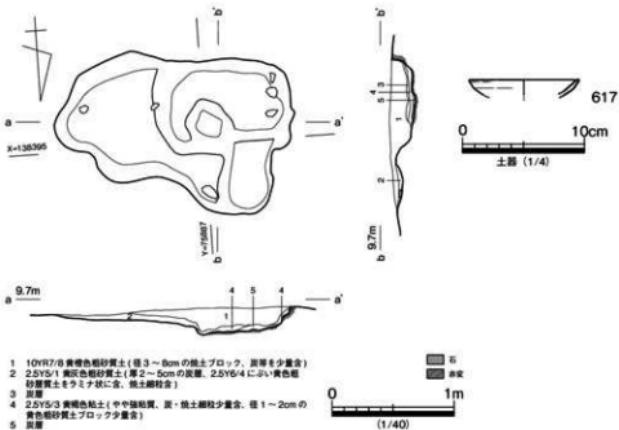
607は砂岩製砥石。現状で表裏2面に使用痕を認める。また、大きく欠損し、破断面を含め、被熱による変色や煤の付着が認められる。606は3面に自然面を残すサヌカイト石核。

608は断面矩形の鉄釘。頭部を折損する。

焼成遺構

SF01(第93図)

8区東半部で検出した焼土坑である。東西2.20m、南北1.61m以上、北端部は試掘トレーンチに削られるものの、南北坑の西側に小規模な東西坑が接続し、平面形は概ねT字状を呈する。南北坑は残存深0.07mと浅く、断面皿状を



第94図 SF02 平・断面・出土遺物実測図

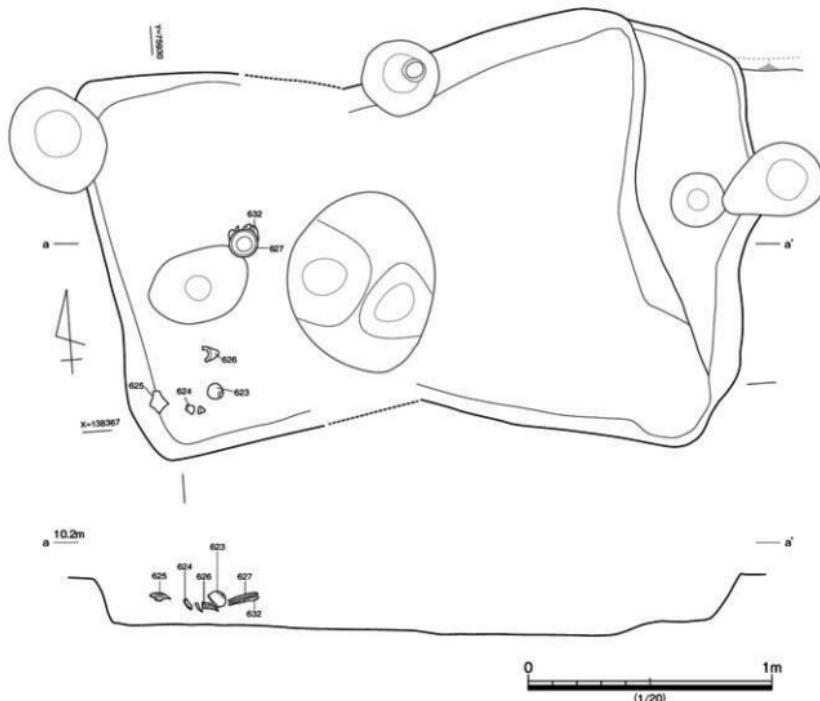
呈し、東西坑は南北坑よりも0.02mと僅かだが深く掘り込まれる。また、両坑の間は馬の背状に高まりが認められた。

埋土は5層に細分され、概ね中位の層厚0.02m程の炭層をパックするように、上下に灰層と考えられる灰色粘土や黄橙色シルトが堆積していた。おそらくは複数回の燃焼行為が、土坑内でなされたと考えられる。また、床面の被熱は、東西坑周壁部で顯著であり、南北周壁はやや内傾して立ち上がり、埋土中から後述するように、天井材と考えられる焼土塊が一定量出土していることから、ドーム状の天井が架構され、この東西坑部が燃焼室であったと考える。周壁の傾斜から想定される天井高は0.6～0.7m程度である。一方、緩やかに外傾して立ち上がる周壁西部は、煙出し部が設けられていたのであろう。さらに、東側南北坑床面には、燃焼室より連続する灰層や一部炭層が堆積し、燃焼室の灰の掻き出しや製品の搬出等の目的で設けられた作業床と考えられる。

遺物は、土師質土器皿・杯を中心とした小片や焼土塊がコンテナ半箱程度出土した。灰層のほか炭層からも出土しているが、焼成不良や完形資料を含まず、出土した土器類が製品であった可能性、つまり土器焼成構であった可能性は低いと考えられる。また、炭窯としても、県内での当該時期の類例とは構造面での相違点が多く、後述する炭化材の樹種の点でも違和感がある。SF02を含めて、本遺構の機能については、今後の課題としておきたい。

609～615は土師質土器杯。609の内面には煤が付着する。616は土師器高杯で、古墳時代前期に属する混入資料である。出土遺物より、楠井編年第Ⅱ期2段階を中心とする時期と考えられる。

なお、本遺構及び後述するSF02より出土した炭化材について、樹種同定と放射性年代測定を実施した。詳細は第4章に掲載する。樹種同定では、いずれもニヨウマツ類であった。他の木材に比して可燃性の樹脂を多く含み、単位重量当りの燃焼熱量も高いことから、燃料材として利用されたと考えられる。また、放射性炭素年代測定の結果は、14世紀～15世紀初頭とされ、考古学的な調査成果と概ね矛盾しないと考える。



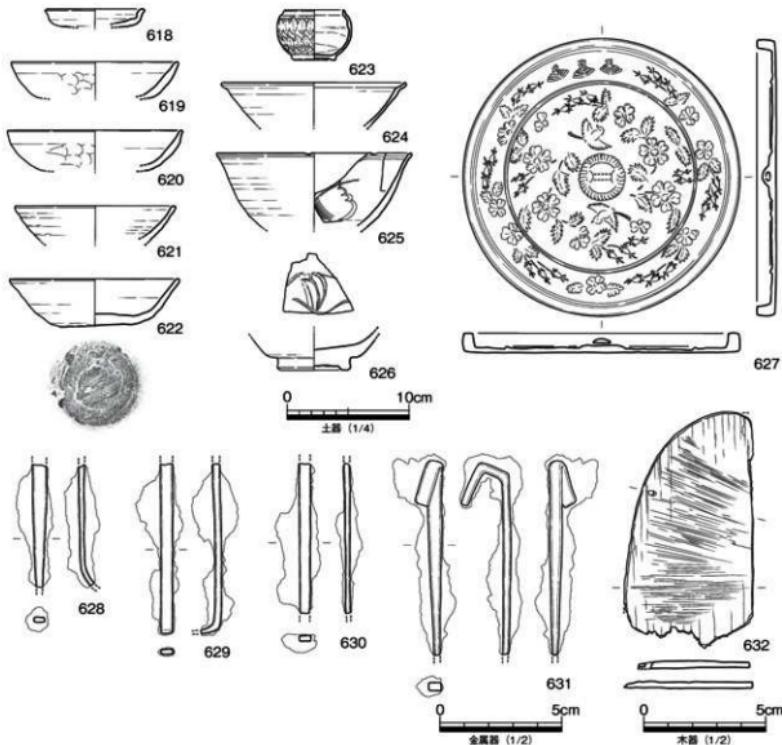
第95図 ST01 平・断面図

SF02 (第94図)

11区東端部で検出した焼土坑で、既述したSF01と、平・断面形態にやや差はあるものの、基本構造は近似し、同様な性格を有する焼成遺構と考える。SD04と重複し、切り合い関係より後出する。東西192m、南北126m、平面形は歪な隅丸方形状を呈する。底面形状より、東半、北西、南西と概ね3つのエリアに区分され、残存深は、東半部で0.05m、北西部で0.18m、南西部で0.22mと、南西部の東西11m、南北0.7mの隅丸方形部が最も深く掘り込まれた、反時計回りの階段状を呈する。

埋土は5層に細分され、上下2層に大別する。上層の黄橙色粗砂質土は、土坑上面を広く覆うように堆積した土壤で、遺構廃絶後の人為的な埋め戻し土と考えられる。下層は、層厚0.02~0.05mの灰層や炭層が概ね水平堆積し、本遺構でも複数回の燃焼行為が想定される。また、床面の被熱痕は深く掘り下げられた南西部に顕著であり、本坑では周壁及び床面にも被熱が認められた。また周壁は、南側部を中心に垂直に近く掘り込まれ、また埋土中から焼土塊が一定量出土しており、既述したSF01同様、天井が架構されていたと考えられる。一方周壁西部は、中央に僅かなテラスを有して外傾し、床面もやや西へ高く設定され、煙出し部が付設されていたと考える。

遺物は、土師質土器皿・杯や瓦器等の小片や焼土塊がコンテナ1/3箱程度出土したが、大半は器種不



第96図 ST01出土遺物実測図

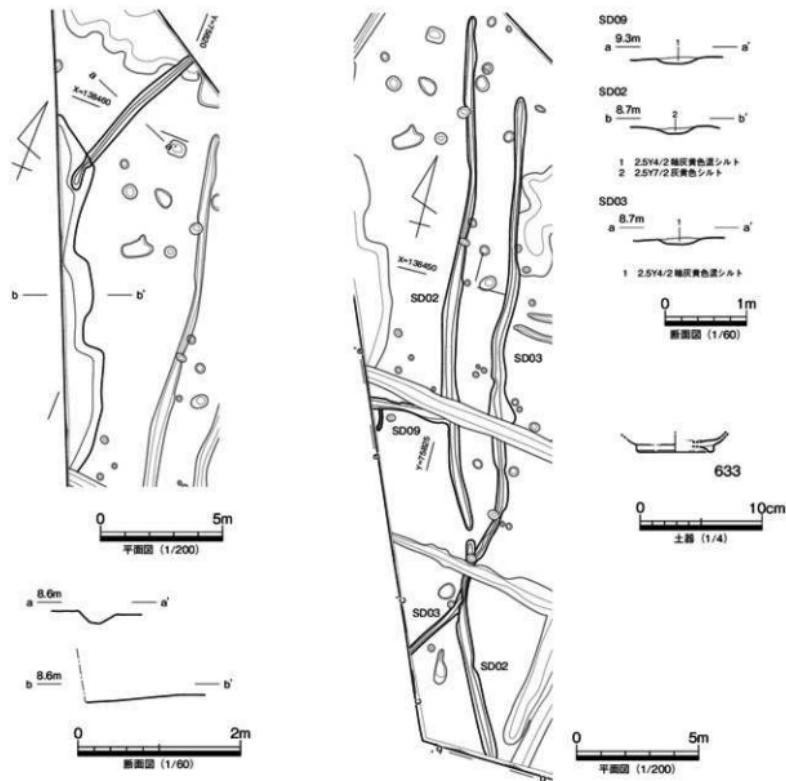
詳の小片であり、図化可能な資料は土師質土器皿 617 のみしか出土していない。

墓

ST01（第95・96図）

2区北西部SX03内で検出した土葬墓である。調査時に、SX03の床面まで掘り下げる墓壙掘り方を検出したが、遺構の検出状況の写真より判断して、SX03上面より掘り込まれていた可能性が高いと考える。また、小穴数基と重複するが、いずれも墓壙上面より掘り込まれているようである。墓壙掘り方は、東西約2.7m、南北約1.65m、主軸方向N 87.7°Wの歪な隅丸方形を呈する。残存深は、SH01床面より0.18mを測り、断面は概ね平坦で、床面東端部に幅約0.3m、高さ約0.05mのテラス面を伴う。埋土は、黒褐色シルト混り細砂の単層であった。

遺物は、和鏡 627、青白磁壺 623、青磁碗 624～626については出土位置を記録し、それ以外については一括して取り上げた。前者は、墓壙西端部に集中し、いずれも床面より8～10cm程度浮いて出土しており、副葬品と考えられる。墓壙掘り方が概ね矩形を呈するこ



第97図 SD01(左)・SD02・SD03・SD09(右) 平・断面・出土遺物実測図

と、棺の緊結のために使用されたと考えられる鎌が出土していることから、木棺墓と推定される。副葬品の出土レベルは概ね一定しており、おそらくは棺内に副葬されたのであろう。磁器類は若干散在して出土しており、遺体や木棺の腐食に伴う棺内への土砂の流入により、やや移動した可能性が考えられる。人骨は遺存していないかったが、上述した副葬品の配置より、西頭位に埋葬された可能性が考えられる。この場合、墓壙規模から推定して、伸展葬であった可能性が高いが、本地域の当該時期の土葬墓では屈葬が多数を占め、埋葬姿勢については判断を保留したい。

遺物は、上述した副葬品以外に、弥生土器甕・鉢、土質質土器皿・杯や瓦器碗等の小片約80点と、サヌカイト剥片1点が出土している。いずれも小片化しており、墓壙埋土中に混入したものと判断し、大半は図化していない。

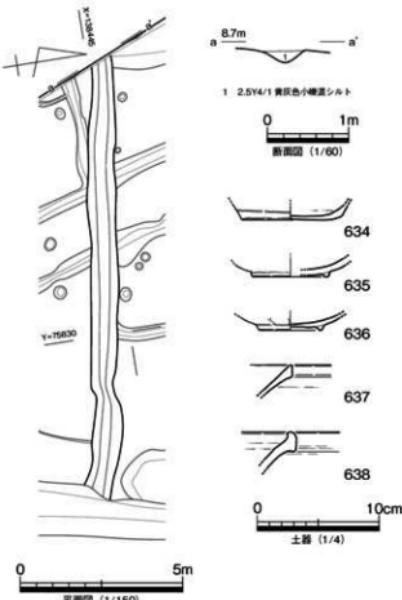
623は完形で出土した青白磁小壺。本来は蓋を伴うが、欠落する。三重県蓮台寺溝ノ口経塚群15号経塚より類似例が出土している。青磁碗は3点出土しており、いずれも破片を副葬したものである。龍

泉窯系杯III-3類624、同碗I-2類626、同碗I-3類もしくはI-4類625である。このうち626は、大宰府で13世紀中頃～14世紀初頭前後の標識資料とされ、最も年代の下る資料である。

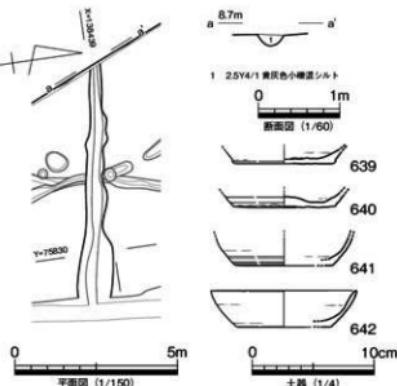
銅鏡627は面径11.3cmの和鏡で、直角式中縁に径7.8cmの中線単圈を巡らし、中央に振菊低座鉢を配した桜花双鳥鏡である。鏡面を下にして、僅かに西に傾いて出土した。銅鏡の下面からは、周縁に柄穴を有する薄い板材(632)が数片に割れて出土した。一部は脆弱なため図化できなかった。蓋や側板は出土していないが、おそらくは銅鏡を収納した曲物容器底板の可能性が想定され、容器に収納した状態で副葬されたと考えられる。平面形は、長径約15cm、短径約12cmの楕円形に復元され、現状で1箇所径2mmの緩穴を認める。また、鏡に接する板上面には、放射状に細い纖維状のものが付着しており、板材の樹種同定時(第4章に記載)に、藁の可能性が想定され、分析者は板草履の可能性を指摘している。調査時には、和鏡を収めた容器の可能性を想定していたが、今後類例を検討する必要があろう。

618～622は詳細な出土位置が不明なため、副葬品か否かの判断は行えない資料である。土師質土器Ⅲ618、同杯619～622がある。いずれも破片資料である。621の内面には煤?が付着する。622はSX03より出土した破片と接合したことから、棺上面の墓壙埋土中より出土した可能性が高い。また、口縁部の一部を欠損するのみの完形に近い資料であり、棺上面への副葬の可能性も考えられる。619は、銅鏡出土レベルより下位から出土しており、おそらくは墓壙掘削後、棺を安定させるため墓壙底面に敷き均した土壤の中に混入していたものと考える。

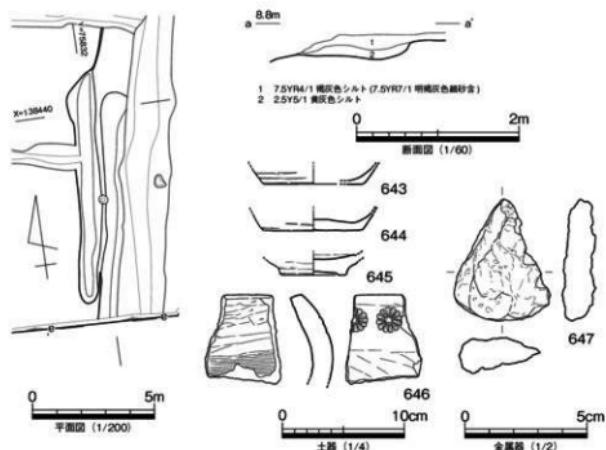
628～631は鎧で、木棺の緊結に使用したものと考えられる。631は墓壙南西隅、630は墓壙西半中央部より出土しているようだが、番号の混乱や出土位置の不明なものもあり、鎧の具体的な使用位置は



第98図 SD08 平・断面・出土遺物実測図



第99図 SD10 平・断面・出土遺物実測図



第100図 SD11 平・断面・出土遺物実測図

同位体比値は、華南領域に分布し、原料として、輸入された中国銭を鋳つぶして製作された可能性が高いことが判明した。同様な和鏡は他に3面が知られているようだが、分析試料数が乏しく、製作地を明らかにするまでには至らなかった。同様な試料の分析が増加すれば、明らかになることが多いと考えられ、今後の課題としたい。

溝

SD01 (第97図)

5区西端部の南北溝と、北西隅部の南北溝をSD01として調査したが、平面図からは切り合い関係をもった別の溝と判断する。

遺物は、詳細な出土位置は不詳ながら、弥生土器、須恵器、土師質土器皿等の小片が19点出土している。

SD02 (第97図)

5区西半部で検出した南北溝である。中位でSD09が西にほぼ直交して合流する。南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。調査区内で0.4m程度途切れるものの、延長約30.5mを検出した。SD03・SD08・SD10と重複し、切り合い関係よりSD08・SD10より先行し、SD03より後出する。検出面幅0.50～0.65m、残存深0.04～0.12mを測る。埋土等に関する情報は、不詳である。

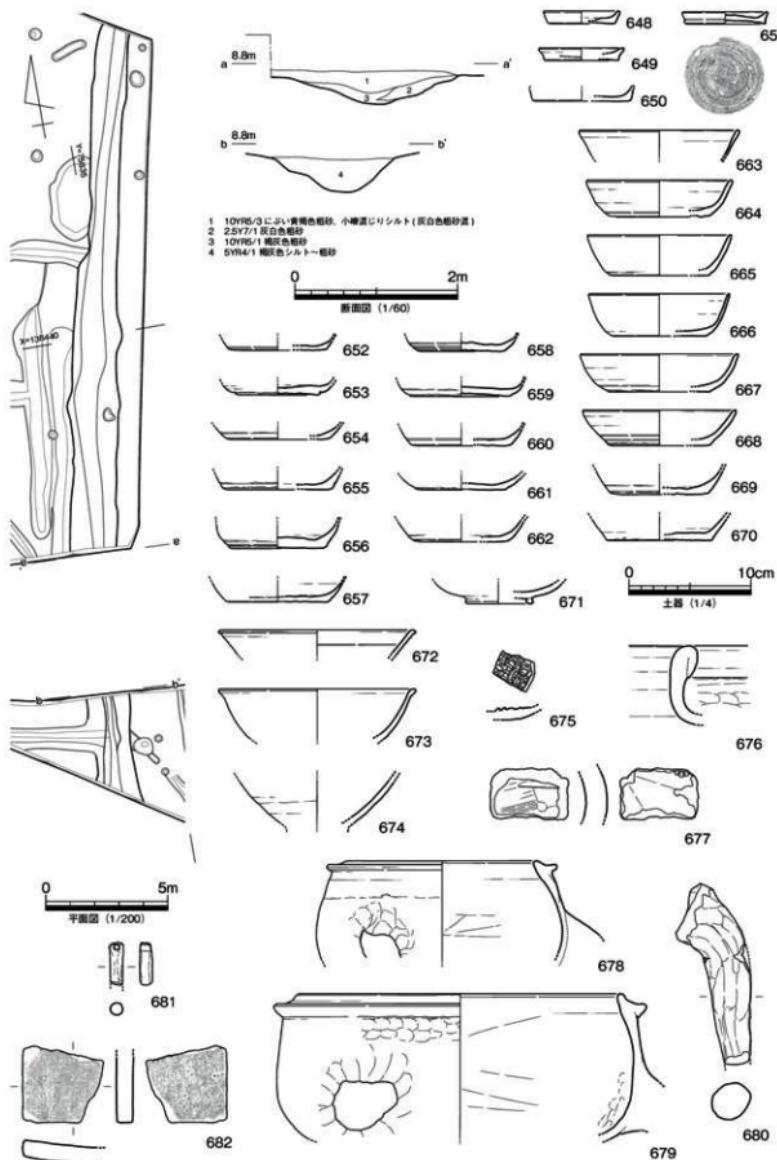
遺物は、弥生土器や土師質土器の小片8点が出土したのみである。633は黒色土器碗。小片のため、混入の可能性が高い。

SD03 (第97図)

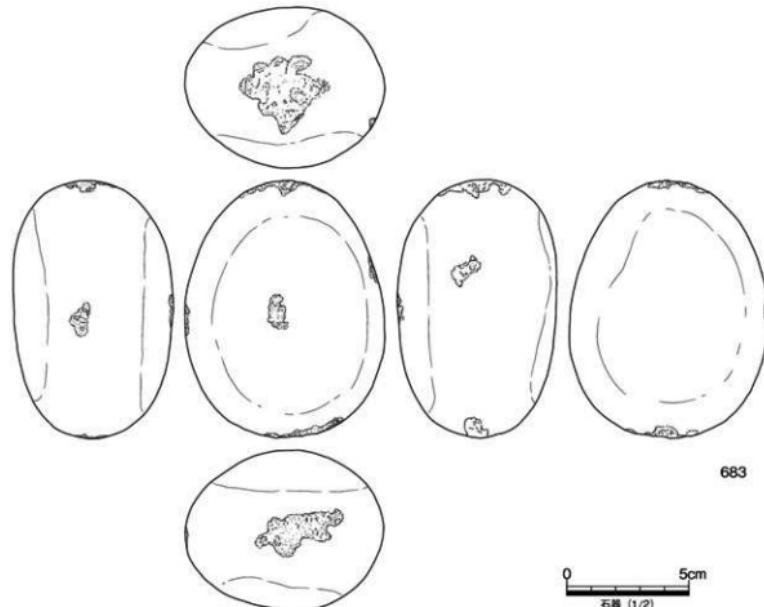
5区西半部で検出した南北溝である。南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。SD02・SD08・SD10と重複し、切り合い関係より、そのいずれよりも先行する。検出面幅0.24～0.44m、残

不明である。比較的残りのよい631では、上端を矩形に折り返しており、その内幅は1.0cmであることから、側板か底板かは不明だが、棺材の厚みは少なくとも2cm程度はあったものと思われる。

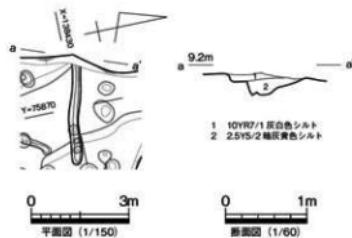
なお、本遺構出土の和鏡について、鉛同位体比分析を実施し、その詳細は第4章に記載した。分析の結果、本和鏡の鉛



第101図 SD12 平・断面・出土遺物実測図1



第102図 SD12出土遺物実測図2



第103図 SD13平・断面図

検出面幅 0.61 ~ 0.78 m、残存深 0.23 m 前後を測り、流路方向は N 81.07° W に配される。底面の標高は、東端部で 8.39 m 前後、西端部で 8.32 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が考えられる。埋土等に関する情報は、不詳である。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器皿・杯・碗・足釜、瓦器碗、東播系須恵器捏鉢等の破片がコンテナ 1/5 箱程度出土した。**634** は土師質土器杯。**635** は十瓶山周辺窯産須恵器碗。小片であり、混入資料であろう。**636** は和泉型瓦器碗。尾上編年Ⅲ期後半か。**637・638** は、東播系須恵器片口鉢である。森田編年第Ⅶ~Ⅸ期。14世紀~15世紀初頭に位置付けられよう。

存深 0.04 ~ 0.12 m を測る。埋土は暗灰黄色シルトの単層であった。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器の小片が 11 点出土したのみである。

SD08 (第 98 図)

5 区中央部を東西に横断して検出された。西端は調査区外へ延長し、東端は SD12 に切られ、より以東で延長部が確認されず、検出長は約 13.4 m を測る。

SD10 (第99図)

5区南半部で検出した東西溝である。西端は調査区外へ延長し、東端はSD11に合流する。検出長は約7.3mを測る。検出面幅0.34～1.04m、残存深0.13～0.23mを測り、流路方向はN 81.07°Wに配される。埋土等に関する情報は、不詳である。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器杯、瓦器碗等の破片が50点程度出土したが、ベース層の旧流路に包含されていた弥生土器や須恵器片が大半を占める。639～642は土師質土器杯である。

SD11 (第100図)

5区南東部で検出した南北溝である。南端は調査区外へ延長し、北端は東西溝SD08に切られ、より北で延長が確認されず、検出長は約11.9mを測る。また、既述したようにSD12より先行し、中央部でSD10が西よりほぼ直交して合流する。検出面幅2.46m以上、残存深0.09～0.25mを測る。平面図からは2条の溝の重複の可能性が考えられるが、詳細は不明である。埋土等に関する情報は、不詳である。

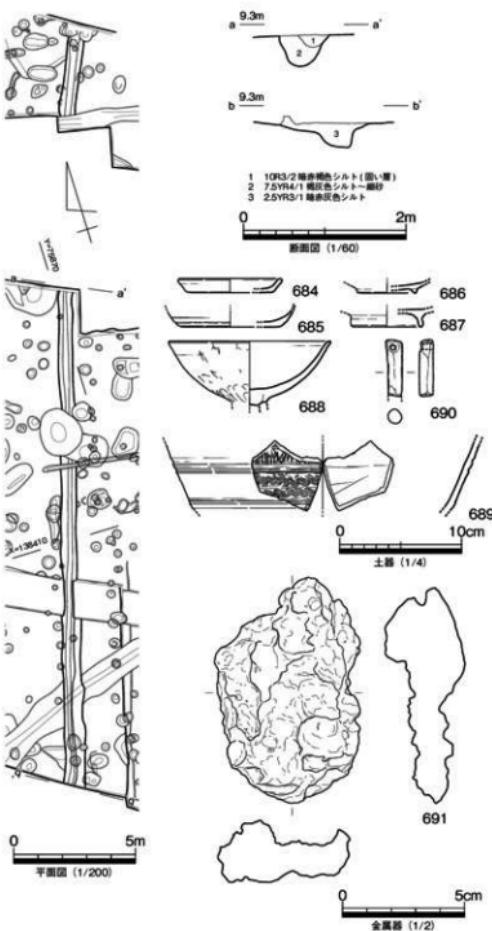
遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器皿・杯、黑色土器、瓦質土器

火鉢、白磁碗、棒状土錐等の破片や

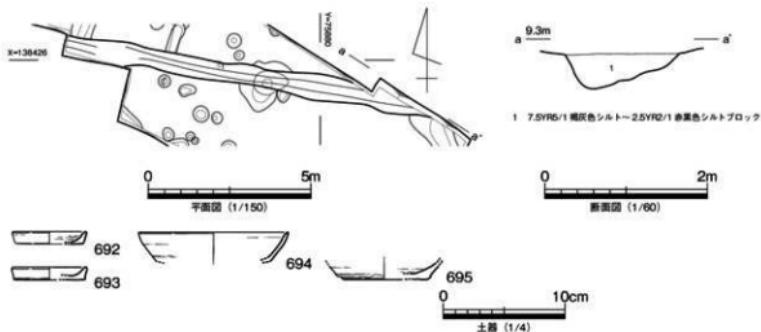
鉄滓がコンテナ1/4箱程度出土した。643・644は土師質土器杯。645は大宰府分類白磁碗IV類。646は瓦質土器火鉢で、口縁部外面に花文のスタンプを押捺する。奈良火鉢と考えられ、立石の浅鉢III類に分類される。647は鉄滓である。

SD12 (第101・102図)

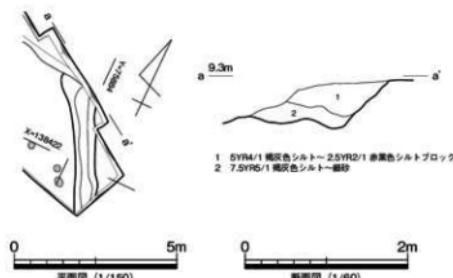
5区東端部から9区西端部で検出した南北直線溝である。5区と9区の間に約6mの未調査部分が存在するが、流路方向や規模が酷似しており、一連の溝と判断した。南北両端は調査区外へ延長し、未



第104図 SD14 平・断面・出土遺物実測図



第105図 SD16 平・断面・出土遺物実測図



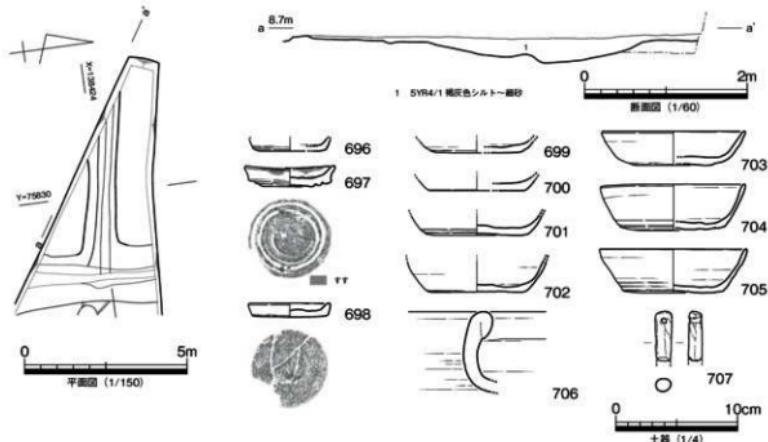
第106図 SD17 平・断面図

調査部を含め検出長は約31.1mを測る。平面図より判断して、SK04、SD08・SD11と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出し、南端部でSD18が西よりほぼ直交して合流する。検出面幅1.09~2.10m、残存深0.28~0.31m、流路方向N 13.22° Eに配され、断面形は皿状を呈する。なお、底面の標高値からは、流下方向を特定することはできなかった。

5区南端では、SD12を含め複数の溝が重複するが、土層断面図にはそれら溝の重複はとらえられていない。

遺物は、弥生土器甕、須恵器杯・高杯、土師質土器皿・杯・碗・足釜、黒色土器碗、瓦器碗、白磁碗、青磁碗、備前焼甕、瀬戸・美濃系陶器卸皿、棒状土錐、平瓦等の破片のほか、サヌカイト剥片、磨石、砂岩被熱縛、円縛等がコンテナ1/2箱程度出土した。648~651は土師質土器皿。651は完形品である。652~670は同杯。671は和泉型瓦器碗。底部の小片で器表面のマメツが著しく、混入資料であろう。672は大宰府分類白磁碗V-4類。673は同安窯系青磁碗II類か。678・679は土師質土器足釜。678では体部外面に、679では体部下半外面に煤が厚く付着する。14世紀中葉~後葉か。680は同脚部片である。674は白磁碗。被熱によるためか、釉が変色し一部剥落する。広東系の製品の可能性がある。675は同卸皿である。内面の一部に灰釉がかかる。676は備前焼甕。乘岡編年中世3期。14世紀後半~15世紀初頭。677は瓦質土器火鉢。外面に花文のスタンプが押捺され、SD11出土の646と同一個体である可能性が高い。681は土師質の棒状土錐。胎土中に角閃石や雲母細粒を含み、搬入品の可能性がある。682は瓦質焼成の平瓦小片である。

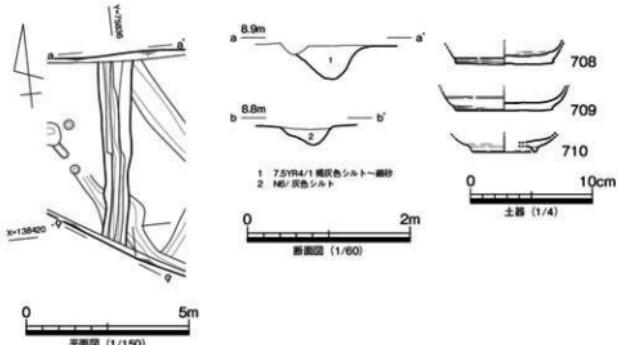
683は主に側面と上下端面に顕著な敲打痕を認めるランプロファイア製の叩石で、混入資料であろう。



第107図 SD18 平・断面・出土遺物実測図

SD13（第103図）

6 b 区西端で検出した東西溝で、東端は調査区内で途切れ、西端は隣接する 6 a 区で延長が確認されなかつたことから、調査区間で屈曲するか、途切れるものと考えられる。延長 3.04 m を確認した。検出面幅 0.23 ~ 0.32 m、残存深



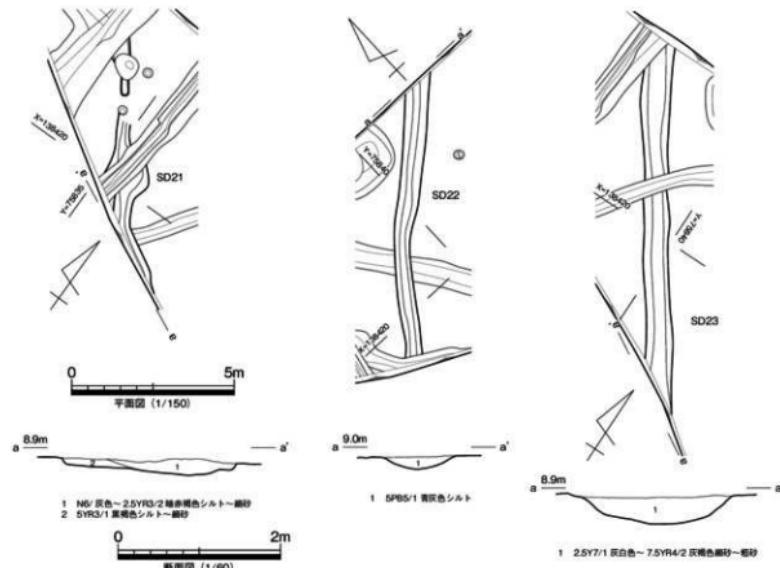
第108図 SD20 平・断面・出土遺物実測図

0.16 m 前後、流路方向 N 77.93° W を測り、断面形は概ね皿状を呈する。底面の標高は、東端部で 8.96 m 前後、西端部で 8.84 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、暗灰黄色シルトの単層であった。

遺物は、器種不詳の土器小片 2 点が出土したのみである。

SD14（第104図）

6 b 区中央部から 9 · 10 区にかけて、調査区を横断するように検出した南北直線溝である。検出総延長は 31.08 m を測り、両端は調査区外へ延長する。切り合ひ関係より、SK54 より後出し、SK48、SD16 より先行する。検出面幅 0.52 ~ 0.80 m、残存深 0.20 ~ 0.30 m、流路方向 N 172.3° E を測り、断



第109図 SD21(左)・SD22(中)・SD23(右) 平・断面図

面形は椀底状を呈する。底面の標高は、北端部で 8.78 m 前後、南端部で 8.80 m 前後をそれぞれ測り、高低差より流下方向を特定することは困難であった。埋土は褐灰色シルト～細砂の単層であった。

遺物は、弥生土器高杯・甕や土師器、須恵器杯、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器椀、瓦器碗、棒状土錐等の小片のほか、10 区よりサヌカイト剥片 1 点、9 区より鉄滓 1 点がコンテナ 1/2 箱程度出土した。**684** は土師質土器皿、**685** は同杯である。**687** は黒色土器碗。佐藤編年 I-2～I-3 期に週り、小片でもあり混入資料であろう。**686** は和泉型瓦器碗底部小片。**690** は土師質の棒状土錐である。**688** は布留式新相の土師器高杯、**689** は 6 世紀前半代の須恵器器台で、いずれも混入資料である。**691** は鉄滓である。

SD16(第105図)

6 b 区を東西走する直線溝で、東西両端は調査区外へ延長する。10.30 m を検出した。切り合い関係により、SK20、SD14 より後出する。検出面幅 0.52～0.80 m、残存深 0.31～0.36 m、流路方向 N 80.31° W に配され、断面形は椀底状を呈する。底面の標高は、西端部で 8.70 m 前後、東端部で 8.76 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が考えられる。埋土は褐灰色シルトの単層で、赤黒色シルトのブロック土を含む。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯・足釜、瓦器、焼土塊等の小片約 70 点が出土した。**692・693** は土師質土器皿。**694・695** は同杯である。

SD17 (第106図)

6 b 区東端で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、8.5 mを検出した。切り合い関係より、SD16より先行する。検出面幅0.59～0.86 m、残存深0.33～0.39 m、流路方向N 27.57°Wを測り、断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は、北端部で8.63 m前後、南端部で8.75 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は2層に細分され、下位には溝機能時の堆積層とみられる細砂の堆積が認められる。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器の小片15点が出土した。

SD18 (第107図)

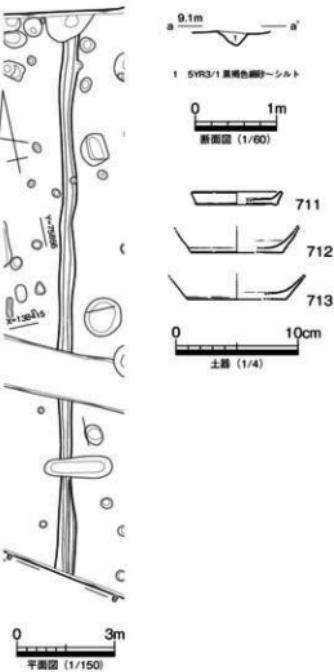
9 区西端で検出した東西溝である。既述したように東端はSD12に合流し、西端は調査区外へ延長する。約4.3 mを検出した。検出面幅0.88～0.92 m、残存深0.23～0.30 m、流路方向N 79.43°Wをそれぞれ測り、断面形は概ねU字状を呈する。底面の標高は、東端合流部で8.35 m、西端部で8.28 mをそれぞれ測り、高低差よりSD12より分水して、西へ流下していた可能性が考えられる。SD12の流路底面の方がやや深く掘り込まれていることから、合流部以北に堰状の施設を設置する必要があるが、調査においてはそうした構築物は確認されていない。埋土は褐灰色シルト～細砂の単層で、SD12上位層と共通する。

遺物は、須恵器や土師質土器皿・杯、備前焼窯等の小片約60点が出土した。696～698は土師質土器皿。697・698はほぼ完形で出土した。また697の口縁部外面の一部に煤が付着し、燈明皿として使用されたと考えられる。699～705は同杯である。704の外面には煤が付着する。705は9区SD12出土の破片と接合した。706は備前焼窯。5区SD12出土の676と近似するが、同一個体ではない。乗岡編年中世3期。14世紀後半～15世紀初頭。707は、土師質の棒状土錐である。

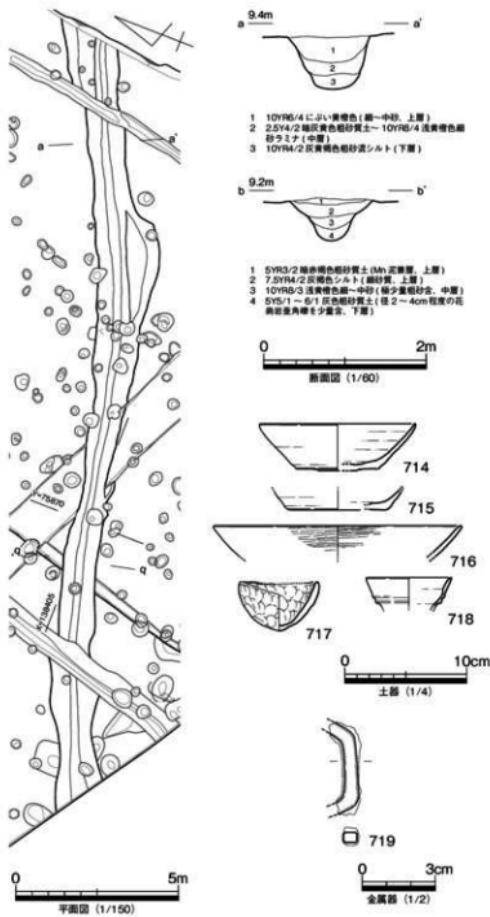
SD20 (第108図)

9 区西端部で検出した南北直線溝で、両端は調査区外へ延長する。5.5 mを検出した。SD21・SD23と重複し、切り合い関係よりいずれよりも後出する。検出面幅0.68～1.03 m、残存深0.20～0.40 m、流路方向N 65.55°Eを測り、断面形は概ね碗底状を呈する。流路底面の標高は、北端部で8.40 m、南端部で8.46 mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は褐灰色シルト～細砂等の単層であった。

なお、本溝はSD12と流路方向や埋土が近似し、後述する出土遺物に大きな時期差が認められないこ



第110図 SD24 平・断面・出土遺物実測図



第111図 SD29 平・断面・出土遺物実測図

切り合い関係より、SD23より後出する。北端延長に7区が位置するが、7区で延長溝は確認されず、7区との間で東西どちらかへ屈曲するか、7区SX01へ合流するものと考えられる。後者の場合、後述するようにSX01には滞水下の堆積が認められ、水溜状の機能も想定されることから、後述する流下方向より、本溝はその排水路として開削された可能性も考えられる。溝は、検出面幅0.46～0.68m、残存深0.14～0.25m、流路方向は中位でやや屈曲するものの概ねN 43.8°Eを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は青灰色シルトの単層であった。底面の標高は、北端部で8.73m、南端部で8.51mをそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が考えられる。

とから、同時期に併存していた可能性が高いと判断され、屋敷地間を区画する区画溝として開削されたと考えられる。また、両溝間幅約20mは、通路としての機能も想定される。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯・碗・足釜等の小片約40点が出土した。708・709は土師質土器杯。710は同碗である。

SD21(第109図)

9区西端部で検出した南北溝であり、北端はSD12によって切られ、南端は調査区外へ延長する。5.7mを検出した。溝の規模や流路方向より、5区SD02の南延長部の可能性を考えたが、断定はできないため別溝として報告する。切り合い関係より、SD22より後出し、SD20より先行する。溝は、検出面幅0.21～1.34m、残存深0.05～0.20m、流路方向はやや蛇行するもののN 36.02°Wを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰色～暗赤褐色シルト～細砂の単層であった。

遺物は、混入と考えられる弥生土器小片4点が出土したのみである。

SD22(第109図)

9区西端部で検出した南北溝で、南端はSD21に切られ、北端は調査区外へ延長する。8.37mを検出した。また、

遺物は、弥生土器壺や土師質土器皿等の小片25点が出土したが、大半は混入と考えられる。

SD23（第109図）

9区西端部で検出した南北溝で、北端はSD20に切られ、南端は調査区外へ延長する。10.35mを検出した。また、切り合い関係よりSD22より先行する。溝は、検出面幅0.74～0.92m、残存深0.34～0.40m、流路方向N 34.22°Wを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は、灰白～灰褐色細～粗砂の単層であった。流路底面の標高は、北端部で8.39m、南端部で8.46mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿等の小片5点が出土したのみである。

SD24（第110図）

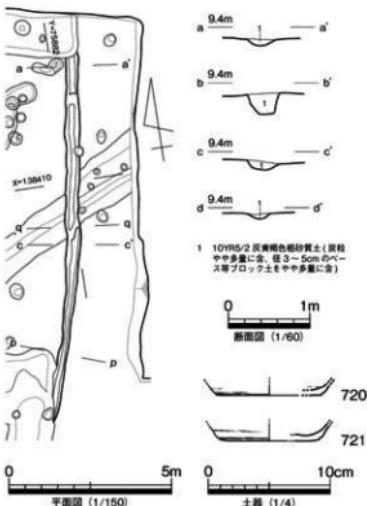
9区東半から10区西端部で検出した南北直線溝である。北端はSK27に切られ、南端は調査区外へ延長する。16.42mを検出した。溝は、検出面幅0.28～0.55m、残存深0.07～0.15、流路方向N 127.3°Eを測り、断面形は碗底状を呈する。埋土は黒褐色細砂～シルトの単層であった。底面の標高は、南端部で8.86m前後を、北端部で8.83m前後をそれぞれ測り、高低差に乏しく流下方向は特定できなかった。導・排水路ではなく、区画溝として開削された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺・壺や須恵器、土師質土器皿・杯等の小片約60点が出土した。711は土師質土器皿、712・713は同杯である。

SD29（第111図）

10区南東隅より11区北東隅にかけて、第3面で検出した東西溝である。両端は調査区外へ延長し、約23.4mを検出した。検出面幅1.0～1.06m、残存深0.52～0.63m、断面形は逆台形状を呈し、流路方向は若干蛇行するものの概ねN 69.8°Eに配される。埋土は、3～4層に細分され、上層は溝廃絶後の自然堆積層、下層は溝機能時の堆積層とみられるが、流水痕跡に乏しい。底面の標高は、南西端部で8.48m前後、北東隅部で8.67m前後をそれぞれ測り、高低差より南西方向へ流下した可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺・壺・高杯・鉢や土師器皿、須恵器杯・甌、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器、瓦器等の小片約150点のはか、サヌカイト剥片等が出土した。大半は混入資料とみられる弥生土器片である。714・715は土師質土器杯。719は鉄釘で、表面に木目が残る。716は、9世紀代に遡る東北系？の黒色土器皿。外面はベンガラにより赤彩する。717は弥生時代終末期に遡る小型鉢、718は須恵器甌で、いずれも混入資料であろう。



第112図 SD30 平・断面・出土遺物実測図